刻翻

『春城日誌』（二九）

――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

春城日誌研究会

この年、「日記の末に記す」として市島謙吉（春城）は、還暦を迎えた事、第一次世界大戦が終息した事を記した。そして、一年を振返って、矢張り前年の「早稲田騒動」について「学校騒動はまかりなりに成り、余等の冤罪も雪かれたり」と振り返っている。市島は維持員、終身維持員と図書館長の職を辞した。しかし、会計に不正があったとする巷説(1)があり、市島等を悩ませていた。それも前年暮れの維持員会で会計調査報告書が承認を受け、内容が「早稲田学報」二月号に掲載された事によって、そうした説は否定された。この事を以て市島は、「雪冤」と記したのである。

大隈重信総長、平沼淑郎学長という新体制が発足し、市島は表面にこそ立たなかったが、学苑育ちの理事を支え、校規の改正等には彼等の相談役としての役割を果たしたのである。

市島等が維持員である早稲田実業学校においても、前年に学苑から離れた天野為之の校長復帰問題が生じ、十二月に教員、生徒のストライキが起きた。同月八日に、実業学校の維持員会があり、市島は出席して「天野も出席、議場空気平穏を欠き結局何等の決定を見す」と先行き不穏であることを記した。ストライキを契機に十数名の教員が辞職して、天野の校長が実現し、反対派の維持員は更迭され落着を見た。

大学の要職から引いた市島であったが、早稲田大学出版部（主幹）、日清印刷株式会社（相談役）と、引き継き要職を務めている。年末にはこの二つの会社に大きな改革があった。

十二月六日に日清印刷は重役会を開き、それまでは専務取締役が会社を代表していたが、社長制とする事を決定した。ついで、二十一日に市島は社長に推薦されこれを諾した[2]。

市島は、この年の年初より自ら主幹である出版部（部長高田早苗）を、株式会社組織にする事を検討していた。十二月十九日に組合会議（市島は株主会議としているが、正しくは組合会議）を開催し、匿名組合から株式会社への移行を決定した。部長の高田が社長に、主幹の市島は副社長に就任したのであった。日誌には、同日に特記として取締役、監査役や相談役など役員の名前や、株券を相続できるようにしたことなどが記されている。因みに、市島は一五〇株を所有し、その価格は七、五〇〇円で、副社長の俸給は年額一、五〇〇円となったとある。

そして、この年に市島が力を注いだもう一つの事業が、大日本文明協会と文明書院の経営であった。大日本文明協会は、明治四十一年に大隈重信の「東西文明の調和」の精神を実現する目的で大隈を会長として設立された文化団体である。事業内容は、欧米の啓蒙的書籍の翻訳出版、学術講演会等であった。市島は、当初は深く関わりを持たなかったが、大正四年に理事長制が設けられて、早稲田大学の会計監督や、出版部での経営手腕を買われた彼が就任した。この時期の同会は、第二の発展期とされている。つまり、従来の翻訳書の出版に加えて、社会教育を目的としたより広い学術講演会を開催した。またこの年、市島は自らの発案である「時局の研究」という目的を持った定期的な研究会を始めた。加えて大正九年から大隈の講話を聴く会「月一会」も彼の提唱で持たれたが、これも市島の考えを実現したものだった[3]。

「日記の末に記す」には、次のようにある。

本年数月間労したるは、文明協会并ニ文明書院の事なり。諸色高価の影響を受け文明書院も死ニ瀕し従来のごとく人任かせ委し去る能はず。進むて書院のため壱万円の株金を募り、更らに協会の為に寄附金を募り、これも成功して年末迄ニ二万円以上を募集し得たり。来年は進むて一活躍を試みんことを期す。

『財団法人文明協会三十年誌』においては、当初の翻訳書の出版事業に加えて、学術講演会や時局研究会等を開催した。それらも当時の早稲田大学の事業拡大と相まって東京以外の都市で開催するなど、一大文明普及運動と発展した。さらに、講演等の内容は、「学術講演録」、「時局研究」、「文明協会講演集」といった刊行物に収録され、広く普及する事が試みられたのである。

こうした事業の展開に伴い、出版への需要も生じたので、独自の出版社が企画された。文明書院がそれである。市島は、この文明書院の社長を兼ねていると述べて、その建て直しに腐心している記述がなされている。しかし、この書院の実態は今のところ管見に入らず詳述することは出来ない。

こうした多忙にも関わらず、年初に惜しまれて急逝した吉田東伍の記念録を編纂し、終焉地の銚子に記念碑を建立するという仕事にも取り組んだ(4)。

八月には米騒動が勃発、東京にも不穏な動きがあったと伝えている。ただ、政府が報道管制を敷いたために、情報が正確に伝えられていないとしている。十七日には、古書店歩きを兼ねて銀座、浅草辺を散策し、暴動の跡を見て歩いた。

市島の古書蒐集はこの年から袖珍本（巾箱本）に力を入れた。恒例となった散策を兼ねた古書店めぐりでは、集中的に袖珍本を求めた。加えて自ら筆を執り筆写もしている。市島がこれに関心があると聞いて、知人から色々と袖珍本を贈られるなどしている。後の話しだが、昭和二年十月に大隈会館で市島の蔵書の売り立てがあった。その中で、

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

「小精廬寸珍本叢書」（小精廬は市島の斎号）として約二千五百冊が目録にある。

後半生を彩る随筆家市島春城の名をたかめる活動は、この年から本格的に始まったと言ってよいだろう。新潟新聞と北越新報の郷里の二新聞に「衝口発」や「赤裸々」、「酒前茶後録」、「意外録」等の連載を始めた。これらは、長年時に応じて書き留めたものをもとにして書かれたものである。

注

（1）反対派が、高田早苗、市島、田中唯一郎を槍玉に挙げ校費を流用したのではないかとの疑いをかけた。会計実務を取り仕切っていた田中に不正経理があり、後暗い事実が多々あると弾劾し、市島については「田中氏の背後に意図を引いている人物は書画骨董で数万円を儲けた市島謙吉氏」とのゴシップを流布させていた。（『中央新聞』大正六年六月二十日号）

（2）日清印刷株式会社は、明治四十年、主に早稲田大学出版部の刊行物の印刷を目的に設立された。拙稿「日清印刷株式会社の創業について」―早稲田大学関係者の起業―（「早稲田大学史記要」第二十九号、一九九七年九月）参照。

（3）『財団法人文明協会三十年誌』（文明協会編刊、昭和十三年六月）

（4）記念碑は翌年八年に銚子の海静寺（現銚子市清水町）に建立され、記念録は『吉田東伍博士追懐録』（高橋源一郎編刊、大正八年）として刊行された。

二〇一五・一〇・三一　金子宏二記

（春城日誌研究会　金子宏二、久保尾俊郎、酒井清、松井叶子、渡辺輝子）

双魚堂日誌

大正七年戊午

○七月

一日

晴。市島琢蔵より来書。町田忠治を訪ふて、石田友治の事を云々す。坂口五峰来訪、一、二寸珍詩本を贈らる。山田清作来話、又種村宗八来る。徳川侯より越後行紀念品を贈らる。午後一時」（二三ウ）動坂の高田邸ニ学校旧幹部（坪内、塩沢、田中穂積、坂本三郎、余）集会、学校時事ニつき内議す。終つて高田ニ招かれ、自笑軒ニ晩餐を共にして帰宅。本日炎熱九十二度。池之端斎藤方ニ寸珍本二、三種を購ふ。

二日

晴。暑気大いに加はる。坂本三郎来訪ニ付、昨日高田邸会合の仕末を報す。浮田、杉山、大鳥居、並木、森脇来会、文明協会の前途ニつき協議し、午餐後皆去る。客去る後寸珍写本ニ執筆す。」（二四オ）

三日

晴。山沢俊夫より来書。又、山形の渡辺徳太郎より同県商業学校長ニ任せられたるニ付挨拶状到る。田中唯（ママ）たり唐本西遊記一部を贈らる。石田友治来話。菊屋ニ依頼の書匣一出来、更らに大小六個注文す。真島信城養子典次を貰らい受ニ付、内子祝物を齎らし其の寓所を訪問す。十一時内藤久寛を日石会社ニ訪問す。大観雑誌ニ対する内藤の寄附金壱千円領収、外ニ余ニ壱百円、避暑費用として贈らる。小川町ニ二、三の図書を購ふて帰宅。」（二四ウ）壱千円、使を以つて大隈信常へ送り届ぐ（ママ）。広井一来話。

四日

晴。五時起床。今日箱根へ赴くニ付、行李を調ふ。坪内逍遙の名にて小涌谷三河屋へ電信を発す。山田清作、佐々木護邦来訪。坪内より劇ニ関する論文を載せたる雑誌「中外」を贈り来る。昂同伴、九時家を発し十時十分発の汽車にて発す。車中森田勇次郎ニ会す。国府津ニ下

車、電車ニ移る。車中中井錦城ニ会す。」（二五オ）午後一時半、湯本に達し自動車を傭ふて小涌谷三河屋ニ着、于時二時三十分也。湯本より小涌谷迄自動車代六円也。此旅館昨年逍遙の泊する処なり。此辺流石ニ高く涼気秋の如し。着報を東京へ発す。散策、旅館の遊園を歩し、更らに下つて千條の滝を訪ふ。滝近かく団琢磨経営中の別墅ニ附属する小茅舎あり。景勝の地形を利用し、水を庭中ニ引き入れなか〳〵に趣味あり。此地の風景尤も佳なるは雲烟の変化百態なるにあり。眼前の山忽ち」（二五ウ）失して忽ち現はる。深山の気分掬すべし。帰来一浴す。湯泉無色と云ふ能はさるも臭気なし。

此地の案内記を閲するに、此地海抜二千尺。明治十六年、横浜の商人乃ち三河屋（鳳来楼）榎本恭三土地を買収し、十九年旅舎を開きたるより一の温泉場となる。所謂る箱根七湯外の新温泉場なり。もとの大地獄ニ対し小地獄を唱へしもの、乃ち此地なり。近年万余の吉野桜を植え春時紅雲山を埋め、箱根第一の勝区と称せらる。」（二六オ）夕刻ニ至り冷気益々甚しく、ネルの単衣二枚を重ぬ。一酔、八時就寝。

五日

六時起床。戸を排して見れば、濃霧海の如く咫尺の山を見す。点滴を四簷ニ聞く。雨来るか如くにして雨にあらず。児ニ対し山霧と雨の経界を論す。忽ちにして点滴窓を打ち、時を経て益々甚し。余笑つて曰く、是れ雨なりと。今日、児東京ニ帰へる予定の処、雨の為一日滞留、余も長く居るを欲せす。明朝同帰と決す。」（二六ウ）十一時濃霧霽山容皆露はる。散策、三井、藤田両男の別荘辺を経て磯野某の別荘前ニ楽焼の家あり。数盆の高山植木を盛る。豆蹶躅、シャクナキの姿勢愛すべし。且らく憩ふて此辺別荘地の地価を問ふ。昨今壱坪約五円と云ふ。最早別荘地ニ適する所少なしと語る。午後、駕籠を傭ふて強羅遊園ニ到る。小涌谷より十四町ばかりの悪路を行く。こゝは二十年前亡友山田霜岳か頻りに勝を説きし所。近年小田原電鉄、此辺の土地を広く買収して経営ニつとめ、終ニ此園を経営す。園和風、」（二七オ）洋風の二あり。

此辺火山作用にて大石散乱し、其間ニ樹木叢生する所多し。和風園は其の乱石の最も多き所にて、巧みに其石と地の高低を利用して作庭す。幽邃の趣掬すべし。園内茶室あり。又十余の貸別荘あり。皆風雅也。洋風園は飽まで当世風にて建築物、花卉多くは洋物を取り、宛から成金の庭園を見るか如し。斯る陰陽の二園を函嶺山中ニ見る。意外の感なき能はず。案外ニよき遊園は此の強羅なり。一巡、直ちに帰途ニ就く。途中雨ニ遇ふてかへる。東京」（二七ウ）宅ニ発電。明日帰宅を報す。夜来しば〳〵驟雨到る。

六日

六時起床、時々驟雨あり。八時頃より霽る。八時十分小涌谷を発し、仂車にて下山。九時十分頃湯本ニ着。直ニ軽便電車ニ移り、十時四十五分国府津発の汽車ニ投して午後一時半帰宅。不在中内田貢より寸珍本二種贈らる。帝国通信社より金六十円報酬を送り来る。表具屋へ改装依頼中之前原一誠幅出来。市島九郎より朝鮮」（二八オ）着報あり。近藤磐雄より来書。下谷辺ニ散策して図書を購ふ。夜来雨あり。

七日　日曜日

雨。菊屋来り注文の巾箱本箱最小三較大四個を持参、これにて十八個揃、代金払済。大工を傭ふて廊下、天井ニ架を作りて成る。みつ同伴銀座ニ物を購ふて遣す。終ニ浅草ニ到り浅倉屋ニ三、四の巾箱図書を購ひ、金田ニ飯し活動写真を見てかへる。不在中、実業之世界社主事三宅勘一来訪。晩間昆田文二郎来訪、学校問題ニつき長時間話」（二八ウ）して去る。

八日

曇、冷。早起、粒珠録を録す。丁酉銀行手形期限ニ付、更らに六十日間差入。西条北堂へ金十円郵呈。文明協会の前途并ニ金融等の件ニ付大鳥居、森脇来訪。又湯浅吉郎来話。半日印文を抄して暑を忘る。

九日

晴、風。関太郎、山田清作来訪。印語抄」（二九オ）出無聊を慰す。十一時より日清印刷の重役会ニ臨み、午後帰宅。又印文を抄し昨日来小本一冊写成る。四時より九段魚久

ニ文明協会の件ニ付、広井、大鳥居等と会し、夜に入る迄凝議し、成案を得て散す。

十日

晴、風。増子喜一郎来訪。学校の事を話して去る。文明協会金融の件ニ付、広井一を長岡銀行支店ニ訪ひ、又昆田を古河礦業事務所ニ訪ふて、帰途神田風月ニ飯し、高」(二九ウ)木方ニ鉄瓶を購ひ、一、二書店を訪ふて若干の図書を購ふてかへる。高橋謙三より来書。小林文七母死去ニ付香典を遣す。

十一日

晴。関太郎、森脇美樹、三宅勘一来訪。十時より外出。神田、浅草の書肆を訪ふて一、二の図書を購ひ途中午餐を了る。借入金の件ニ付日清印刷会社より来書。帰宅後、亦抄録を事とし、喫烟を節する法とし、亦鎖暑の法とす。中元ニ好下物を遠方より寄せ来るものあり、晩餐」(三〇オ)殊ニ酒味の深きを覚ふ。本野英吉郎の訃到る。

十二日

天候不穏、暴風起らんとす。早起、抄録例のごとし。佐伯叔作、田中唯一郎ニ書を発す。坪内大造、山田清作来る。小林又七母死去ニ付、青山斎場ニ到り其葬儀ニ列す。九時頃激震あり。十時頃より暴風到る。午後大隈邸ニ到る。文明協会時局茶話会を開く。本日の講演者高峰博士と郵船の寺島也。両人の談話三時間ニ渉る。談話中暴風雨襲来、」(三〇ウ)侯の座敷雨戸を閉ち燭を点するニ到る。五時半帰宅。雨風漸く薄らく。庭園家屋此度は無事也。みつ女子大学の軽井沢寮舎ニ明朝出発の為、今日学校の寮舎ニ宿することゝなり、荷物携帯、本日午後家を去る。不在中、板橋菊松来訪。夜に入り豪雨あり。

十三日

雨霽。多少の風。板橋菊松、安藤宗七来訪。大鳥居弁三来訪、長時間文明協会、文明書院前途の計画を協議」(三一オ)す。午後茶後録を筆す。神田を散策、雑書を購ふてかへる。稲葉岩吉より近著小冊子を寄せ来る。後藤朝太郎、田中唯一郎より来書。又村山亀齢より来書。大阪の松絲女将出京ニ付小波の句画一幅を贈る。

十四日　日曜

雨。早起。日課の抄録了。北堂より来書。十時、青山斎場ニ行き本野英吉郎の葬儀ニ臨む。賀田金三郎方へ人を遣し中元の物を贈る。奥田雲蔵来話。真島信城妻来訪。村口書店を訪ふて四五の図書を購ふ。」（三一ウ）

十五日

晴。冷気秋の如し。在軽井沢みつより来書。村井銀行へ二百円返却。脇森（ママ：森脇）、文明協会の金融の件ニ付来訪。千五百円小切手を交付す。日課の抄録を為す。三宅勘一より来書。午後外出。内藤を会社ニ訪ふて話す。新潟県校友会の件ニ付、松井郡治より来書。今夜、真島信城妻帰国ニ付内子見送る。夜来雨。

十六日

雨後晴。朝来客なく、蛍雪軒叢書を」（三二オ）翻読し又抄録。正午ニ至つて已む。午後出てて図書を漁る。若干を獲てかへる。物を在軽井沢のみつに郵送す。

十七日

雨気一天を蔽ふ。朝来関太郎、種村宗八来る。越後行ニ付平沼淑郎と電話を交換す。抄録半日を消す。新潟新聞社より半季計算書を送り来る。土田亦次郎来訪。物を贈らる。午後散策。又書を漁り、呉俊卿の書画冊（瑠璃版）壱帙を購ふてかへる。余、呉俊卿の刻印を獲ん」（三二ウ）と欲していまだ獲るに到らす。之れを獲て僅かに渇を医すと云ふ。

十八日

曇天。森脇美樹来訪。三輪潤太郎帰国ニ付、窮を訴ふ。旅費十円交付。四、五日前より抄録を始めたる詩話百則成る。松井郡治ニ答書を発す。午後三時より外出、内子と共ニ有楽座ニ大阪の儀太夫を聴き人形芝居を観る。十時帰臥。

十九日

」（三三オ）

雨後霽。山田清作、大鳥居弁三、昆田文二郎来訪。真島信城より礼状来る。軽井沢みつより来書。午後又抄録。酒ニ関する詩話数則を抄し、麹香瑣録と云ふ。余の序文を載せたる膝栗毛輪講第二冊上梓。早大図書館より図書目録全部を贈り来る。余の二十数年苦心蒐集の和漢書二

十万冊収めてこれにあり。学校と離れたる上は時々目録の必要あり。又余ニ取て好個の紀念物なり。量厖大数十冊。差当り容るゝの処を得るニ困む。」(三三ウ)

二十日

土用ニ入る。曇天。九時、内子と共ニ近頃開通の電車ニ乗り早稲田ニ抵り、それより仂車を僦ふて落合の荘ニ到り、十一時過帰宅。午後又出遊、神田の書肆ニ図書を漁り若干を獲てかへる。

二十一日

晴。高田俊雄来話。新潟松井郡治ニ簡し、月末校友会出席断はる。在北海道東儀鉄笛より来書。軽井沢みつより来書。返書を発す。神楽江巻」(三四オ)石より近作の画を寄せ来る。村井銀行より金弐百円六十日の期限にて借入る。増子喜一郎来話。午後、又上野浅草辺の書房を訪ふて本を漁る。僅かに俳翼外一、二点を得てかへる。夜に入り賀田直治着京を報す。

二十二日

晴。山田清作、並木覚太郎来話。真島桂次郎より暑中見舞状到る。午前中読書、午後より外出、二、三書肆ニ就て図書を購ふてかへる。」(三四ウ)

二十三日

晴。小林賢三来訪。踵て鎌田金太郎来訪。其の製する所のセルロイドの玩具若干を贈らる。賀田直治来訪、朝鮮物産を贈らる。客去る後抄録時を移す。午後散策、下谷池之端書肆ニ図書を漁り「曲録」外数部を獲て帰へる。

二十四日

好晴。真島桂次郎ニ簡す。校友石橋規矩四郎来訪。踵て広井一来訪ニ付、長時間文明書院の事を協議す。旗野」(三五オ)如水来訪。午後例のごとく散策、浅草ニ抵り浅倉屋ニ就て一、二の雑書を購ふてかへる。金十三円也納租了。大坂松絲より物を贈り来る。

二十五日

好晴。鎌田金太郎、山田清作、高橋謙三、森脇美樹来話。在新潟鎌田松造、野本信治等より来書。江部淳夫文部省へ転勤、此頃新小川町ニ居を定む。今日同人妻子来訪。物を贈らる。午後散策、図書を漁る例の如し。晩間江部

淳夫来」（三五ウ）訪。日本石油会社より二割五分の配当を受く。昂名義三十株ニ対する配当金半期百八十五円也。

二十六日

好晴。玄関の簀障二枚出来。大工来り浴室を修理す。樋口清策来訪。踵て坂口五峰来話。午後、坪内宅へ高田と共ニ訪問、学校の件并ニ出版部之事を多時協議。五時より牛込築土梅月ニ出版部の幹部会を開らき、高田、坪内、余、小久江、種村、高田俊雄と」（三六オ）会す。旗野如水、沖荘蔵より来書。

二十七日

昨夜通宵睡眠を得す。昨日坪内方ニ多量の茶を喫したる祟ならん。今朝は四時起床。会津八一より物を贈らる。早朝、高田を動坂の邸ニ訪ひ、学校問題ニつき余の身事を語り、午餐を共にして別れ、更らに坪内逍遙を訪ふて高田ニ対すると同様の件を話す。不在中小田島彦太郎、森脇美樹来る。軽井沢みつより来信あり。」（三六ウ）

二十八日　日

晴。菊屋花を齎らし来る。林瑛来る。横山、田中俊二郎ニ紹介す。森脇美樹、川上邦基来訪。田中四郎左衛門ニ紹介状を与ふ。坂口五峰来訪、越人詩話挿入書画の安排等につき午後二時迄手伝ふ。客去る後抄録。五時より昆田文二郎ニ招かれ上野の梅川ニ賀田直治、江部敦夫等と飲む。五峰より乙二宛夏目成美長簡壱通、自撰新潟才人絶句二冊を贈らる。和田万吉、小田島桂香ニ書状を発す。」（三七オ）

二十九日

晴。森脇美樹、堀元恭、広井一、牧野謙次郎交々来訪。又斎藤樹、小田島桂香来る。小田島を午後迄留めて例のごとく風流談ニ時を費す。稲川篆字詩幅を購ふ。価十五円払了る。軽井沢みつより来書。日清生命保険会社より借入金四千円ニ対し、半季利子百四十円也、交付了。国書刊行会より本朝通鑑第一巻を贈り来る。

三十日

晴。軽井沢みつへ帰京旅費を郵送す。北越新報社の斎藤樹ニ「赤倮々」と云ふ題下ニ叢話数則を口授筆録せしむ。日清印刷の重役会ニ臨む。会社ニ於て高田と学校問題を」（三七ウ）

内話す。帰宅後坂口五峰来話。

三十一日

晴。斎藤樹来る。昨日ニ引続き赤俣々の叢話十則を筆記せしむ。高田より電話にて一昨日渋沢邸ニ於ける学校問題ニつき詳細の報告あり。渋沢邸」(三八オ)に於て高田、坪内か、天野学校ニ復帰すれば共ニ維持員たる能はずとの事、中野武営の憤怒する所となり、何事も決定ニ至らず。但し大隈候軽井沢へ赴かるゝニ付、出発前、侯の意見を求めんと渋沢、中野、侯を訪問し、天野復帰の事を云々するや、侯は厳しく其不可を論し、今復帰を許すか如き再応自分の面目を潰す者なりと迄云はれ、渋沢も少しく怒気を含み、最早学校之事はお世話出来すなど言ひ出したるも、中野は辛ふじてそれを引き留めたる位にて、一年の中裁運」(三八ウ)動、結局ニ於て何も要領を得る能はず、とは笑止と云ふべし。此件報告〔ニ付〕坪内を訪ひ正午帰宅。市島友松の訃到る。午後炎暑外出ニ堪へず、茶後録を筆して無聊を慰す。高橋源一郎より来書。故坪内鋭雄記念帖揮毫了。大工佐藤吉五郎来る。」(三九オ)

○八月

一日

晴。早起、抄録を事とす。斎藤樹来る。赤俣々の叢話数則を授く。山田清作来訪。大槻文彦宛添書を附す。みつゝより来簡。午後も家居抄禄をつゝく。夜に入り驟雨あり。新発田新聞は市島友松の死ニつき詳細を掲く。丑の日の海水浴ニ溺死せるなりと、気の毒千万也。

二日

晴。湯浅吉郎、山田清作外校友一人来」(三九ウ)訪。去月廿七日北京発田中唯一郎消息到る。市島友松死去ニ付、相続人長松ニ吊状并ニ香を送る。神田下谷の書肆を訪ふて、寸珍薄葉本二種を得。真島信城娘来訪。高田より電話にて学校問題ニつき云々の報あり。踵て昆田文二郎来訪、長時間先づ天野抜きに高田、坪内を維持員ニ復帰するニ付、渋沢、中野愈決断したる旨ニ関し其経路を話して去る。夕刻軽井沢ニ在りしみつ、帰宅。出兵の宣言出づ。

三日

晴。山科凌雲来り「働」と云ふ雑誌ニ談話を乞ふ。又斎藤樹来る。赤倮々叢話六則を筆録せしむ。みつを伴ふて神田の書肆ニ図書を漁り、小本一、二種、新刊書二、三種を購ひ、宝亭ニ飯してかへる。藤田礼経死去。礼経は現住宅の旧所有主也。

四日　日曜

晴。菊屋花を携へ来り、旧花と換ふ。小久江成一来話、物を贈らる。京都山口福太郎より来書。抄書半日を消す。児女を江部方ニ遣り鰹節を贈る。午後、女児を伴ふて」（四〇ウ）銀座ニ抵り、金春館の活動写真を観、松喜ニ牛肉を喫してかへる。帰路清涼を覚ふ。不在中増田義一来訪。

五日

晴。今朝殊ニ涼味を覚ふ。五時起床。玄黄社の鶴田久作来話。文明協会より掛合をつけたる板権侵害の件ニ関す。森脇美樹踵て来る。湯浅吉郎、森岡格雄来訪。森岡より物を贈らる。書肆より詠茶詩録四冊持ち来る。壱円五十銭払。万屋来る。不用図書売却。午後、赤坂田町の書肆」（四〇オ）を訪ふ」（四一オ）て小本を漁り一、二種得てかへる。今夜より明朝ニかけ暴風到らんとする警報あり。植木屋来り予防手当を為す。半夜時々驟雨あり。颱風終ニ外れて到らず。

六日

雨。斎藤樹、種村宗八来訪。驟雨去来、草木初めて生気あり。児、知人より大輪の牽牛花を贈らる。銀月の水滸伝を読む。午後二時大雨到る。晩間増田義一来訪。学校の維持員ニ就て頃日決定の件を報告す。天野を除外するにつき、余并ニ田中唯一」（四一ウ）郎をも維持員となさゞる件ニ関しては、余より云々の苦情を提出し、長時間ニ渉り、増田去る。

七日

曇天、雨。今朝七時半高田を動坂ニ訪ふて終身維持員問題ニつき余の面目問題を凝議の末、結局大隈総長ニ凛議する事とし、明日高田軽井沢へ侯を訪ふ事となる。十一時辞去。琳琅閣ニ立寄一、二の寸珍を得てかへる。不在中種村来る。午後赤倮々の叢話四、五則筆す。新潟新」

(四二オ)聞の山田穀城ニ書を投して衝口発続載の件ニ付云々申し送る。不在中高村真夫来訪。北堂より菓子を贈らる。賀田直治夫婦来り、明後日朝鮮へ赴く旨を報し、且つ物を贈らる。五時より広井一と共ニ内藤久寛を麻布材木町ニ訪ひ、文明協会并ニ文明書院の事を協議し、夜に入り帰宅。

八日

早朝より驟雨頻りに到る。増子喜一郎房州発の書信到る。稀書複製会より大畑定」(四二ウ)一を遣す。五、七の知人ニ紹介、名刺を与ふ。山田清作、森脇美樹、高村真夫交々到る。高村を留めて午後迄話す。賀田方へ人を遣し物を贈る。増子ニ書状を発す。散策神田の書店ニ景徳鎮陶録外二、三の図書を購ふて帰へる。巻菱洲来る。印代の内五円渡す。鳥取の遠藤董より来書。

九日

晴。広島発、早速整爾、軽井沢発斎藤樹より来書。赤倮々の稿を修め長岡」(四三オ)の北越新報へ発送す。種村宗八、高橋源一郎来話。午後も赤倮々の稿を修め三時ニ到り已む。直治夫婦、朝鮮へ出発ニ付内子見送る。下谷方面の書店ニ図書を漁り一、二を得てかへる。

十日

晴。松江発、昆田文次郎の書状到る。高村真夫より来書、又其の欧州紀行を贈らる。江部淳夫、高橋源一郎、広井一来話。高村ニ書状を投す。午餐後四女児を伴ふて散策。南陽堂ニ図書を購ひ、又浅草の」(四三ウ)書肆を訪ふて若干の図書を得、活動写真を観てかへる。

十一日

晴。広井一より来書。早起、出版部近刊トライチケの軍国主義政治学の広告文案を作る。越後の人中村政七息政司、医科大学へ入学ニ付、広井の依頼状を持参ニ付、昂名義にて保証を為す。長崎の本多親宗来話。北越新報の今泉木舌より来書。抄録若干枚。又酒後録を筆す。午後倦来り、又図書漁りを為す。」(四四オ)田代英一来訪。

十二日

晴。山田穀城より来書。渡辺寅治紹介にて報知社の窪田直太郎、名家手簡を携へて来訪。此人茶人にて自信庵虚

心と云ふ。種村来る。トライチケの広告文案を与ふ。長岡の北越新報、今朝到達の紙上より、余の赤倮々の叢話を掲出し始む。池田竜一来話。新潟新聞に衝口発の続稿を寄せんとし、午後その材料の選択に苦心し、漸やく十数則を得たり。」（四四ウ）

十三日

晴。早起、書を鈔す。亦赤倮々の稿を校補して、北越新報ニ郵送す。本多信教、大鳥居弃三、森脇美樹来訪。十一時内藤久寛を会社ニ訪ふて、文明協会の事を云々し、帰途小川町ニ石亭画談、梅菊譜等を購ふてかへる。貯蔵銀行約手二枚期限ニ付、更らに差入る。田辺碧堂と電話を交換す。坂口仁一郎の依頼にて紫微を小包にて発送せる通知、桜井庄平より到る。」（四五オ）

十四日

晴、風。米価の騰貴は中流以下の国民を死地ニ陥れ、数日前、名古屋、京都、大阪、神戸其他中国筋ニ大暴動り、軍隊を動して鎮圧するに至り、東京ニ於ても漸く不穏の形勢あり。帝室にては内幣金三百万円を救助ニ賜はり、富豪も漸く寄付金を出すに到る。政府壱千万円の国庫金を投し強制的ニ米を徴発して配たんとの議あり。物情騒然たり。小田島桂香、竹石山水の幅を携へ来り、午後迄話して去る。巻菱洲、故桂秀馬の嗣子を伴」（四五ウ）ふて来る。秀馬は余の学友也。嗣子父の衣鉢を続き医科大学の業を卒り今大学の助手たり。

十五日

晴。山田清作、森脇美樹来る。崋山自筆日記の模本出来。内山省三、内藤の自叙伝を書くニ付来訪。余より心つきの事を注意し、自分書きかけの自伝を参考ニ貸し与ふ。増子喜一郎来訪、学校の事ニ付長時間話して去る。北越新報へ赤倮々の稿を郵」（四六オ）送す。亦新潟新聞へ送るべき衝口発の稿を修む。大隈侯軽井沢より帰京ニ付、上野ニ出迎ふ。大阪の米騒動益々拡大、今朝より政府全国の新聞ニ令して全然騒擾記事を載することを禁す。内報ニ拠れば昨夜の大阪には一師団の兵を出して警戒するに至れりと伝ふ。政府は尚恬として其責任を省みず。驚くべき哉。南陽堂、柳湾手沢本五十円の内三十円内渡済。

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

新潟新聞社へ原稿二十余日分、小包にて発送。新潟坂口仁一郎へ紫微の礼を申送る。」（四六ウ）

十六日

晴。高橋捨六の訃ニ接す。早起、日課の謄写を為す。菊屋来り花を挿む。午後、本漁りに市中を散策し、下谷、神田辺の書肆にて、昨夜の模様を聞けば、群衆幾千各所ニ不穏の模様あり。軍隊出動のため何事もなく済みたり。但し夜中は表通り皆燈火を滅し各戸用心したり。硝子戸を打破られたる者は到る処少からす。警官は奈何ともする能はずと。すべて新聞紙ニ記載を許さゞれば実況を聞くの外なし。」（四七オ）

十七日

晴。在奉天総領事館在勤山崎恒四郎より来書。斎藤樹よりも来書。菊屋来る。日課の謄写を為す。今日は特ニ炎暑の甚しきを覚え、筆硯ニ親しむニ懶うし。銀座、浅草辺を散策し、暴動の跡を視察し一、二書店ニ図書を購ひ、浅草の活動写真を見てかへる。活動写真も暴動以来四時ニて特ニ閉会す。旗野蓑織より炭五俵を送り来る。土田潤より来書。」（四七ウ）

十八日　日曜

晴。炎暑。昨日の如く甚た凌き難きを覚ふ。抄録半日を消す。昆田、学校の要件ニ関し来訪。踵て高田より電話にて、二十日朝学校の件ニ関し高田邸ニ会合云々申来る。午後坪内を訪ふて、廿日高田方ニ会合の件ニつき云々す。北海道真島平三郎より来書。赤倮々四、五話執筆。

十九日

晴。早起、赤倮々の稿を修め、北越新報ニ投す。田中唯一郎支那より帰朝。」（四八オ）小説石頭記を贈らる。湯浅吉郎京都より帰来。石禅作の竹筆一枝を贈らる。高橋源一郎越後より帰へり来訪。坂口五峰より来書。京都山田茂助并ニ細川、竹苞楼書店ニ書状を発す。坪内ニ頼み置きたる掛軸揮毫成る。種村宗八来訪。竹田師友画録上巻手写了。午後倦むて外出。神田ニ抵る。錦町ニ出火あり。雑踏甚し。僅かに一書店ニ就て茶史を得てかへる。

二十日

晴。今朝九時高田の動坂邸ニ塩沢、金子、」（四八ウ）中島、

田中唯と共ニ会す。坪内病気、田中穂、坂本旅行中にて来り会せす。平沼を学長とする学校の新組織ニ付塩沢を理事ニ加ふる件ニつき内儀す。塩沢辞退ニつき其の再考を望み、更らに廿二日田中穂、坪内の出席をも求めて再議することゝなり十二時過辞去。琳琅閣ニ立寄図書を購ふてかへる。午後三時、九段坂上魚久方ニ、浮田外文明協会同人と会し、会の前途并ニ文明書院増資のこと等ニつき夜に入る迄凝議す。浅野赤城より来書。」（四九オ）

二十一日

晴、後小雨。早起、日課の謄写了る。亦赤俣々の叢話を筆して正午ニ至る。高田半峰来訪、子息縁談の事ニ付相談を受く。午餐を饗して別る。外出、本郷ニ図書を購ふてかへる。真島中太郎来訪。昂の居室ニ真島と晩酌を共にす。京都竹苞楼より寸珍本七種到達。

二十二日

晴。表具屋を招き幅改装、幅箱を託す。大隈信常より西隣游記を贈らる。京都山田茂助より」（四九ウ）寸珍本数種到達す。十時より高田邸ニ至り一昨日ニ継続学校幹部組織の事を内議す。塩沢、田中穂積を理事とする件ニ付両人共応せず。平沼を学長とし、山英等天野派の傀儡となし了るは、学校を彼等に与ふるも同様にて、実に大切なる危機なり。是非とも犠牲となり、平沼か請ふを幸ひに入つて理事たるべしと力説勧誘をつとめたるも応せず。已むなく一同大隈総長之一断ニ任すべしとなし、高田邸より自動車にて早稲田ニ至り、侯の面前にて成行を云々し、侯よりも」（五〇オ）切に両人ニ起つべき旨勧説あり。両人も一考の上確答ニ及ぶべしとて別室ニ退そき、余等先づ辞して去る。帰宅後田中穂積、塩沢昌貞来訪。今日の処、山英即天野派の傀儡たる平沼を学長とするよりは、寧ろ平沼ニ説き辞退せしめ学校の幹部を現状の儘ニなし、しばらく成行を見るに若くはなしとの意見にて、種々余と打合の上、昆田訪問のため両人去る。紫安新九郎大阪より出京来話。夜に入り塩沢再来、昆田訪問の結果を報す。誤解は解けたる様なれど、到底田中共ニ理事を受け」（五〇ウ）難しと繰返し、十時高田訪問の為去る。

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

二十三日

晴。早起。日課の謄写了る。日本石油会社より増資臨時総会の決定を報告し来る。京都山田茂助并ニ竹苞楼へ書物代を送金す。昆田文次郎学校問題ニ付来話。山田清作踵て来る。高田子息と坪内養女結婚の件ニ付内話す。井上秀夫訳碧巌録を購ふ。桶屋を僦ふて噴泉の井を浚ふ。斎藤樹来訪。坂口五峰より来書。京都細川書店へ注文の寸珍本三種到達。田中唯来訪ニ付学校問」（五一オ）題を協議す。浅野赤城より来書。

二十四日

晴。田中穂積軽井沢発書状到る。学校の件ニ付坪内逍遙来訪。広井一、新聞を起す件ニ付見積書を携帯、多時話して去る。外ニ一、二の客来る。田中唯より電話にて塩沢ニ勧告の結果漸く幹部ニ入ることを内諾したりとの報を得たり。昆田文二郎来訪。学校の事を内話して去る。午後塩沢、田中唯来訪。塩沢より大隈侯ニ対する情誼上理事受任を決したる事ニ付云」（五一ウ）々の挨拶あり。北越新報へ赤倮々の稿を送る。賀田直治より消息あり。

二十五日　日曜

晴。早朝広井一を安田旅館ニ訪問。新聞経営の事より延て文明協会の件を協議し、九時文明協会事務所ニ至り増資の総会を開らき、諸般の事を協議し、十二時帰宅。午後日課の謄写了。女児を拉して浅草ニ散策。浅倉屋ニ図書を漁り活動写真を見てかへる。」（五二オ）

二十六日

晴。京都細川書店へ送金。坂口五峰へ書状を発す。日課謄写了。種村宗八来訪。九時落合の荘ニ到り、枯枝延び過きたる萩其他ニハサミを入れなどして、十二時帰宅。在国府津高田より電話あり。学校の事を云々す。不在中二、三の客到る。午後赤倮々数則を筆す。内田銀蔵近々渡米ニ付告別状到る。和田万吉より来書。有尾敬重蔵画類図録を贈る旨申し来る。南陽堂へ書物代二十三円二十銭払済。」（五二ウ）

二十七日

晴。山田茂助より小包にて寸珍本三種到達。和田万吉より古香堂清賞小包にて到来。種村宗八、高橋源一郎、山

田清作、小田島彦太郎交々来訪。十時、広井一同伴高田早苗を訪ふて、広井発議の新聞経画ニつき協議す。尚他一、二の要件を話し、飯後帰宅。和田、有尾敬重へ謝書を発す。亦内田銀蔵ニ簡し渡米を祝す。夕刻広井一来訪、明日内藤へ同訪を約す。」（五三オ）

二十八日

払暁小雨。在北海道真島平三郎より来書。赤倮々数則を稿す。文明協会より臨時刊行の「生物界と人生」を配本し来る。新潟新聞へ寄稿の衝口発、来月五日より連載の社告出づ。十一時、広井一と内藤久寛を日石会社ニ訪問し共ニ日本倶楽部ニ抵り、午餐後、新聞創設の件、文明書院の件等を懇談し、帰途神田を過き松文堂ニ立寄り、加賀池善ニ注文したる五、七種の寸珍本を得てかへる。帰途驟雨到る。不在中、田原未亡人来訪、武夫疾病の事を云々」（五三ウ）して去る。江部淳夫来訪ニ付晩食を与にす。富山の小沢隆一より西瓜を贈らる。

二十九日

晴。小沢隆一へ謝状を発す。京都山田茂助へ書物代発送。

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

寸珍本目録を修む。九時内藤久寛来訪、同伴高田を訪ふて新聞創刊の件を協議す。午後赤倮々の稿を長岡へ郵送す。炎熱を冒して日課の謄写を了る。晩涼、一浴麦酒を傾く。是れ無ければ活きる能はさる也。」（五四オ）

三十日

昨夜来烈風、朝来益々甚しく驟雨あり。早起、日課の謄写了る。森脇美樹来訪。横山条一郎踵而来る。午後雨風益々甚しく外出を許さす、籠居筆作を事とす。

三十一日

天長節。天気回復。朝、菊屋花を携へ来り瓶ニ挿む。竹田荘師友画録二十枚半日にて写了、全部完結す。人を傭ふて、半日庭園の掃除を為す。今夜、高田主人となり学校の紛擾を処理したる昆田、早速、増田、渡辺」（五四ウ）の四人を東台梅川ニ招飲。坪内、余、塩沢、田中唯与かる。

○九月

一日　日曜　二百十日　無風

晴。肥田野畏三郎より出版費為替入書状到来。広井一、小久江成一来話。又山田清作来る。田中唯一郎来話。午後樋口清策、故吉田東伍奨学資金募集の件ニ付来訪。二時頃より事ニ倦み、両人の娘を同伴し銀座街頭ニ物を購ひ、終ニ晩間松喜牛肉」（五五オ）店ニ飯し、帰路神田を過き、中西屋書店ニ寸珍本五冊を購ふてかへる。

二日

晴。大鳥居弃三来訪、文明書院増資の件ニ付多時協議して去る。印刷会社の本間を招き、肥田野畏三郎より依頼の論語印刷の件ニつき協議す。肥田野へ細書を発す。新潟の坂口五峰、在函根の内藤久寛、在北海道の真島平三郎へ書状を発す。新潟の老医竹山屯の訃到る。北越新報」（五五ウ）社へ赤保々の稿を寄す。これにて完結。日清印刷会社より増資払込ニ関する通牒来る。（今月中壱株につき四円払込の事）

三日

払暁雨あり。坂口五峰着京を報す。竹山屯死去ニ付悔状を送る。種村宗八来話。踵て小田島彦太郎来訪、午餐後去る。坂口五峰出京来訪。本日長岡銀行ニ広井一を訪ひ、銀行の世話にて郵船株十株を購ふ。此価二千百七拾三円」（五六オ）也。名義はみつ所有とし、右代金の内貯金壱千五十五円入、不足分は日石株二百五十円券五枚銀行へ担保ニ入れ、壱千八百円六十日間期限にて借入。広井へ渡し、差額は今月中日清印刷会社の増資ニ応する為めの用ニ供す。

四日

晴。坂口五峰を徳永□（アキ・マヽ）康ニ介す。目黒孝平より電話あり。余の帰省期を問ふ。使を日石会社ニ遣し新株券三十請取。広井一ニ書を投す。金百円也、在北海道真島平三」（五六ウ）郎宛発送す。先年真島家より子弟の学資金若干預りたる残額あり。今、平三郎北海道引払上京ニ付、金の入用を申し来りたるにより遣す也。坪谷善四郎来話。増田義一ニ書状を発し、丁酉銀行約手の裏書をもとむ。数年来継

続のもの也。越後赤塚方より菱一箱到来。これは東京ニ来りし以来初めて受けたる地方土産也。支那かごに分け入れ案頭に置く。関太郎より来書。長岡銀行より株券預り証来る。

五日

晴。丁酉銀行期限ニ付、更らに六十日間約手差入。坂口五峰来訪。踵て目黒孝平来訪。今夜、坂口と共ニ目黒ニ赤坂瓢屋ニ招かる。山田清作来る。坪内逍遙より近著「義時」を贈らる。五峰より寸珍本三種贈らる。肥田野より送金の印刷代、日清印刷会社へ交付す。丹呉勝吉帰国ニ託し、北堂へ書状と物を送る。京都若林書店より来書。増子喜一郎来話。瓢家ニ抵り飲む。酔後目黒の居を訪ひ、酣酔帰宅。」（五七ウ）

六日

晴。内子、みつを伴ふて上野桜木町真島方へ行く。高田より電話にて、新聞の件ニ付、渋沢男訪問の結果を報し来る。広井ニ電話を以つて之れを通知す。学校の新幹部へ田中穂積を入るゝにつき、先頃来皆々努力の結果、愈々理事受任を諾したる趣、高田より通報あり。斎藤樹来る。意移録を北越新報へ連載につき打合を為す。函嶺発内藤久寛より来書。明日帰京を報す。無聊、書を抄す。今日到達の新潟新聞ニ余の「衝口発」と題する叢談の掲載を始む。」（五八オ）

七日

晴。早起、墨林小筆を録す。共済生命保険会社へ保険料納付。今泉木舌より北越名流遺芳第三冊を贈らる。田中穂積来訪、学校の新幹部へ入るニ付、種々の事を話して去る。坂口五峰来話。午後、内藤箱根より帰へる。会社ニ訪ふて新聞の件を話す。帰路神保町一、二の書店を訪ふて、間情小録、五朝別載集を購ふ。余の架中ニある此の二部は皆欠本也。今初めて完本を得たり。国書刊行会より本朝通鑑を配本し来る。京都若林書店より来書、」（五八ウ）直ニ答ふ。

八日　日曜

晴。広井と電話を交換す。在北海道真島平三郎より来書。鈔録四、五枚。娘を伴ふて神田ニ物を購ひ、浅草之大金

ニ飯し活動を見てかへる。不在中田中唯来訪。表具屋ニ托したる幅二、箱四出来。印刷所より北越詩話製本見本来る。夜来雨あり。

九日

雨。朝来寒冷を覚ふ。浮田和民より来書。委曲の心事を叙し、学校の維持員を辞する旨并ニ文明協会の件ニつき云々し来る。客来る前、寸珍写本五、六枚写し了る。肥田野畏三郎へ書留状を発し、印刷費残金送付す。坂口五峰ニ書を投す。日清印刷会社の重役会ニ臨む。午後、五来欣造（素川）来訪。大隈侯を新聞記者と擬して、一談話を大観紙上ニ揚けんことを求む、諾して還す。晩間広井一来訪。晩餐を共にして別る。広井に世話を頼み買入の郵船十株券書換手継了り、今夕領掌。関太郎妻の名義の書状到る。意外の窮境ニ居る」（五九ウ）ものゝ如く関心すべきことあり。今夜、就寝後吐気を催し腹痛を覚ふ。

十日

晴。胃腸ニ故障あるを覚ふ。寝て居るほどの事にあらず。坂口五峰へ書状を発し、越後の炭を求む。並木、森脇、」（五九オ）山田清作、増子喜一郎交々来訪。山田を関太郎方へ遣す。日課の鈔録終る。内藤、新聞の件ニ付今朝渋沢男訪問。電話にて其結果を報す。斎藤樹来訪。田中穂積より電話にて、浮田を終身維持員ニ復する件ニ付云々」（六〇オ）し来る。晩間浮田和民来訪、長時間ニ渉り余より終身維持員并ニ教授ニ復帰すべきを勧む。教授復帰を諾したるも維持員復帰を終ニ諾せず。夜に入り北海道真島平三郎より電報にて送金百円領収を申し来る。

十一日

晴。関太郎一身上の事ニ付来訪。北越新報記者として不日赴任の事ニ決す。吉田東伍紀念録、関執筆中のもの脱稿。種村宗八来話。踵て高橋謙三、昆田文二郎交々来訪。接客ニ忙殺せらる。湯浅吉郎」（六〇ウ）又来話。菊屋来り花を挿む。寸珍書函三個菊屋ニ注文す。京都書店若林より来書。関の病児へ見舞金を遣す。郷里の北堂より来書。午后、抄録又小説を読む。

十二日

晴。学校の要件ニ付、田中穂積と長時間電話を交換す。

大鳥居弃三来話。踵て中谷正夫来り物を贈らる。京都若林書店より寸珍写本三冊小包にて到達。午後は黒岩の探偵小説ニ読み耽り何事も手ニつかず、夕方ニ」（六一オ）至り読了。高田より電話来り新聞の事、学校之事、関太郎の事などを語る。

十三日

雨、風。早起、抄録了る。北海道真島平三郎より来書。文明書院の件ニ付、並木、大鳥居来話。山田清作、関太郎来る。踵て森脇美樹来り、並、大、森と文明書院の差しかゝる金融問題を協議し、十一時皆去る。早大より認可済新校規を送り来る。平山堂より書画売立目録来る。四十日目に理髪。夕刻、広井一外新潟北越両新聞の小池、加賀来訪。」（六一ウ）置酒して薄暮迄語り皆々去る。増子喜一郎妻重病ニ付、金十円見舞金を贈る。増子より謝状来る。

十四日

雨。早起、鈔録了る。京都若林書店へ書物代六円郵送。高橋義彦、坂口五峰、今泉木舌へ書状を発す。関太郎来訪。高橋謙三、鈴木千代吉を同伴し来り、肥料会社の社長物色ニ付長時間話して去る。坂口五峰より来書。午後事ニ倦み出游。近頃帝大の門前ニ移転せる琳琅閣書店を訪ふて二、三の」（六二オ）寸珍本を得てかへる。大阪の鹿田静七ニ書を投し、寸珍本をもとむ。夜半暴風雨おこる。

十五日　日曜

烈風つゝく、雨やむ。早起、日課の鈔録を了る。風十時頃収まる。坂口五峰、新潟より今才調集を贈らる。出游、本郷書店ニ寸珍本を購ひ、神田風月堂ニ飯し、高木方ニ立寄帰宅。午後、大観雑誌に載すべき大隈侯を新聞記者と擬しての論説を立案し、薄暮ニ至り已む。

十六日」（六二ウ）

晴。内藤より、再応渋沢男訪問の顛末を電話にて報し来る。新聞創刊につき渋沢男援助は辞せさるも、男を中心とすることは辞したりと云ふにあり。大鳥居来り、文明書院増資募集九分通り成功を報す。長岡銀行より二千五百円引出しの小切手を交付す。昨日に引つゝき大観ニ掲載すべき余の談話の腹案を定め、半は筆録し了る。踵て

大観記者来る。且つ話し且つ筆録を読み、二時間ニ渉る。午後より落合の荘ニ到り、今を盛りと咲き乱るゝ萩を賞してかへる。坂口五峰ニ書を」（六三オ）発す。薄暮真島信城突如来訪、置酒して話す。寝後、長岡広井一より関太郎を北越新報へ入るゝ事決定の電報あり。

十七日

新聞創刊の件ニ付高田と電話にて話す。在青島肥田野畏三郎より来書。竜眼肉を贈らる。高橋謙三より依頼の件ニ付井上辰九郎と電話にて話す。森脇美樹、文明書院の増資充ちたる旨を報し来る。関太郎来訪。午後より外出。神田辺の書店を訪ひ、二時内藤を会社に訪ふて新聞の件を協議す。不在中坪内逍遙来訪。真島信城世」（六三ウ）話にて越後より木炭十四俵到達。本野一郎逝く。

十八日

雨。村井銀行へ金二百円返金。関太郎来る。内藤久寛より贈られたる餞別五十円渡す。鈴木千代吉、高橋謙三来話。鈔録正午ニ至りやむ。坂口五峰より来書。午後広井一来話。植木屋来り庭樹の手入を為す。大観社より余の談話筆記校訂を求むる為め送付し来る。大阪書店鹿田より寸珍本目録を回附し」（六四オ）来る。直ニ注文の書状を発す。夜来暴風到る。

十九日

風と雨。早起、大観ニ載すべき原稿加筆了る。菊屋花を携へ来る。注文の寸珍書画三個出来。山田清作踵て来訪。十一時、真島信城の来訪を待ち、同伴横浜本牧ニ抵り三渓園を観る。帰途汽車中、偶々園主原ニ会し、園ニつき一、二質す所あり。真島と上野池畔ニ酒食を共にし、桜木町の真島の居を訪ふて」（六四ウ）かへる。加賀幸三より来書。

二十日

晴。今朝、広井一と共に高田を動坂ニ訪ふて新聞経画之件を協議す。外出中、並木、森脇来訪。午後三時、青山斎場ニ行き、本野前外相の葬儀ニ臨む。葬場ニ於て内藤と新聞の要件を話す。終つて文明協会事務所ニ至り、幹部会を開らき、緊要の事を協議す。終つて平河町宝亭ニ晩餐を共にし、食後杉山、広井、並木、大鳥居、森脇を

して」（六五オ）今後の方針を立るため、計算の調査を為さしむ。余は故ら参加せす早くかへる。

二十一日

晴。湯浅吉郎、関太郎来訪。踵て中村康之助、高田俊雄、種村宗八来る。長時間出版部より工業叢書出版の件ニ付協議す。増子喜一郎又来話。広井一より昨夜会合の模様ニ付意外の報告あり。京都若林書店より寸珍写本若干を送り来る。午後大隈邸ニ信常を訪ふて話す。」（六五ウ）帰宅後、無事、寸珍写本を録す。関太郎より来書。

二十二日　日曜

雨。終日降雨。大鳥居弃三、森脇文明書院の件に付行違を弁疏す。広井ニ託して事務所ニ於て前夜の調査を継続せしむ。巻菱洲来る。児を伴ふて外出。銀座に物を購ひ松喜ニ飯し金春館の活動写真を見る。呉文聡死去。今日葬式あり。行く能はず。吊状を発す。」（六六オ）

二十三日

雨。高橋源一郎来る。関執筆の吉田博士紀念録草稿を交付す。関太郎、菊屋来る。文明書院の組織其他重要の件を決するため、杉山、広井、大鳥居、森脇来訪。午後ニ至るまで細大協議し、余社長となり広井監査役たる事、其他前途之計画等を定めて二時皆去る。大阪鹿田書店より来書。坪内逍遙の以尺報尺（沙翁メジヨアー、フヲア、メジユア）、横山又二郎の智識の庫外壱種上梓ニ付、出版部より配本あり。新潟新聞社へ送稿の衝」（六六ウ）口発の稿、今日にて全部十八回ニ渉り載せ了る。前月登載の同様の題目のものと合すれば四十回也。尚ほ閑を得て更らに二十回の稿を寄せんことを期す。紐育発畑田保次の絵はかき到達。半夜雨風甚しく天明に至るも已ます。

二十四日　秋季皇霊祭

雨、風。正午頃より雨収まり、風午後ニ至り益々甚し。学校より新評議員選挙の結果を報じ来る。烈風中、渡辺亨、昆田文二郎相伴ふて来訪。学校の終身維」（六七オ）持員の件ニ付来訪、一時間余話して去る。関太郎来訪ニ付、同人を北越新報紙上ニ於て紹介する談話を筆記せしむ。明日同人出発ニ付、今泉木舌宛書状を附す。飯村俊二より来書。亡父十三回忌の菓子を贈らる。無聊中寸珍写本

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

を鈔す。三時過、風威益々加はる。庭樹震撼、今にも挫折せんとする有様にて不安甚し。幸ニ一樹をも損せす夕刻風やむ。

二十五日

晴、無風。種村宗八、森脇美樹来訪。巻菱」（六七ウ）洲来る、十五円渡済。大阪鹿田静七より寸珍本十数種送り来る内、若干返却、代金十一円六十銭郵送す。真島信城着郷を報じ来る。京都若林へ図書返却。午後、閑を得て茶後録を筆す。寺内内閣辞職後、西園寺ニ大命降りたるも、本日西園寺辞退の結果、お鉢は終ニ原敬ニ廻はり、明日大命原ニ降下せんとの号外出づ。

二十六日

晴。植木屋を傭ふて庭園の樹木若干を移し、又手入を為す。並木覚を招き」（六八オ）文明協会、文明書院の事を協議す。山田清作来訪。稀書複製会の第三回配布本、桃太郎、高館五段二冊出来。

二十七日

晴。新聞創刊の件ニ付昨日高田、内藤、渋沢男訪問。その模様、今朝内藤より電話あり。表具屋ニ托したる書簡二巻出来。諸税十六円五十銭納付。田中唯ニ書状を投す。九時頃より大雨到る。関太郎、越後へ出発の際発したる書状到来。十一時、広井と共ニ内藤を会社ニ訪ふて新聞の」（六八ウ）件を話す。帰途、神田の松雲堂書店ニ二、三の図書を購ふてかへる。富山の小沢隆一に書を発して、薪壱棚の逓送を依頼し遣る。原政友会総裁今日参内、内閣組織の大命を拝す。政党首領にて無爵者の此の大命を拝するはこれを以つて始めとす。徹宵雨あり。

二十八日

雨降りつゝく。今朝雷鳴る、十時頃漸く雨霽。本田信教、湯浅吉郎来話。坂口五峰、関太郎より来書。赤塚啓作妻危篤」（六九オ）の報あり。大鳥居弃三来訪。月末金融の件ニ付、高田早苗へ書状を発す。夕刻より大隈邸ニ大観編輯会あり行く。

二十九日　日曜

雨又晴後風。広井、大鳥居、森脇、並木を会し、文明協会の件ニ付内議す。小田島桂香来訪、午後迄話す。日清

印刷の本間、坂口の著書の印刷ニ付来訪。菊屋来り花を挿むてかへる。植木屋来り、前日ニ引つゝき手入を為す。又、昂の居室ニ添ふ墻根を作る。政友会内閣の閣員定まる。坂口」（六九ウ）五峰より北越詩話例言并ニ原稿壱巻到達す。五峰ニ細書を投す。江部淳夫来話。

三十日

雨。坂口五峰、佐野友三郎より来書。日清印刷の本間を招き、五峰著書印刷の件を処す。稲葉岩吉、支那政治史出版の件ニ付来話。森脇美樹来訪。赤塚啓作妻（内子の姉）死去ニ付悔状を発す。五峰より又二通の郵書到る。村井銀行より金弐百円借入（六十日間期限）、出版部より」（七〇オ）金壱百円也借入。種村を招き稲葉著書の件を協議す。日清印刷会社増資ニ付所有株壱百三十ニ対し、壱株四円即ち五百二十円也払込了る。午後散策、三、四の書店ニ雑書を購ふてかへる。夜に入り真島平三郎来訪。小林文七より来書。」（七〇ウ）

○十月

一日

雨。昆田文次郎、学校の問題ニ付来訪。大江乙、山田清作踵て来る。肥田野畏三郎より来書。山口県佐野友三郎へ図書并ニ書状を発す。高橋義彦、石塚三郎出京来訪あり。浅野赤城、小田島桂香も追々来り、午後二時迄故吉田博士の遺稿紀念録其他ニつき種々の打合を為す。増田義一、学校の問題につき来訪。新潟新聞社山田穀城より身上の問題につき細書到る。坊間ニ出て、」（七一オ）図書を購ふ。小久江成一母の訃到る。和田万吉より来書。

二日

雨。坂口五峰ニ細書を発す。森脇美樹来話。坂口五峰、小沢隆一より来書。中村康之助、種村宗八来訪。工業叢書出版の件ニ付協議す。田中唯一郎来話。稀書複製会担任者山田清作、大阪、京都へ出張ニ付下村正太郎、永田好三郎、谷村一太郎、今井貫一等へ添書を交付す。日清印刷の本間を招き、」（七一ウ）北越詩話の印刷ニつき指図

を為す。再応、坂口ニ書状を発す。晩間、浮田博士来話。夜に入り山田清作来る。

三日

雨、冷気甚し。湯浅吉郎来話。文明協会の紀念会を開く件ニ付、浮田、杉山等と共ニ大隈侯を訪ふて、諸般の打合をなし、正午帰宅。小久江成一母死去ニ付往吊。本日学校維持員氏名各新聞社ニ通知を発す。余と浮田、総長とも終身維持員の指名を受けたるも辞退せる旨発表あり。」（七二オ）右ニ付報知記者来訪。其の理由を問ふ。即ちそれニ答へて返す。関太郎より来書。午後籠居、鈔録を事とす。

四日

晴。今朝四時起床。高橋義彦、石塚三郎、高橋源一郎の来るを待合せ、自動車ニ同乗、本所の停車場ニ到り六時二十分発の汽車ニ投し銚子ニ赴むく。吉田東伍終焉碑を建るの地を相せん為め也。十時過銚子着。先づ観音堂地内に入り検す。境内乱雑俗臭」（七二ウ）紛々足り。僅かに一所を見立て、犬吠岬ニ向けて発す。途中一高丘あり。磴を拾つて登攀す。眺望甚佳也。これを亦候補地とす。終ニ犬吠ニ達し暁鶏館ニ入り午餐す。于時一時を過く。余の此地ニ来り見るは今回を始めとす。此地日本の東端なり。暁鶏館の左手に突出する白塔は灯台也。飯後灯台ニ到り縦覧を乞ふて一覧し、終つて自動車を僦ひ銚子迄戻り、校友今津の家を訪ふて建碑の事を図り、又吉田終焉の旅館吉野屋を訪ふて、」（七三オ）直ちに帰東の汽車ニ投す。九時本所着。神楽江巻石より近作の画を贈らる。又、賀田直治より来書。

五日

雨。早起、鈔録終る。山田清作、今夜関西へ行くとて来る。神楽江巻石来話。午後、神田ニ図書を漁る。獲る所なし。小川為次郎、大阪より来る。高田を動坂ニ同訪。今夜、高田ニ招かれ、小川と与に下谷伊予紋ニ飲む。和田万吉より来書。」（七三ウ）

六日　日曜

陰。高橋義彦、高橋源一郎来訪。銚子ニ建碑の件ニ付多時協議、午餐後去る。高橋義彦、今夜帰国。坂口五峰よ

り来書。午後より外出、図書を購ひ、浅草の小林文七方ニ広重の絵を見、こゝにて和田万吉外図書館協会幹部と落合、向島へ遊歩ニ出かけ、墨堤弘福寺境内ニ淡島寒月を訪ひ、薄暮汽船にて浅草へもとり、駒込の鰻屋前川方ニ会食し、夜十時帰宅。中野武営危篤の報」（七四オ）到る。

七日

雨。日清生命保険会社より、増資の計画ニ関する通牒到る。文明協会の支配人田村来訪ニ付、歴史図譜の件ニ付一、二の注意を与へてかへす。茶後録を筆し半日を消す。千葉県銚子今津亮三郎へ書状を発す。又、菓子小包にておくる。関太郎より来書。表具屋ニまくり二枚表装托す。赤坂の書店を訪ふて雑書を購ふ。」（七四ウ）

八日

晴。十二日紅葉館ニ招飲の案内、昆田、渡辺、増田、早速の連署にて到る。多賀出京、赤塚より遺物其他のものを贈らる。田中穂積、学校の新募金計画ニつき来話。郷人長谷川篤来訪。午後散策、本郷の書店二、三を訪ふて若干の図書を購ふ。中野武営死去。

九日

陰、冷気甚し。朝来客なく無事ニ困み、鈔録ニ時を費やす。十時、外出。内藤を日石会」（七五オ）社に訪ふて文明書院増資ニ付、余の名義にて二千五百円出金の事を決定。広井一を長岡銀行ニ訪ふて文明書院其他の件を話し、帰路今川小路の風月堂ニ飯してかへる。真島信城より葡萄壱箱贈り来る。午後、小田島桂香来訪、印三顆を購ふ。晩餐後去る。菱屋来り文明書院のため家屋借入之事ニ付云々す。（此家は水道町の旧借宅なり）

十日

晴。赤塚啓作、真島信城へ物を贈られたる礼」（七五ウ）状を発す。電話料三ヶ月分納入。貯蔵銀行約手期限ニ付更らに六十日間割引了る。森脇美樹来訪。越後村上学生岸良隆来訪、二、三校友に紹介す。佐野友三郎、坂口五峰より来書。午後、落合の荘に行く。田中穂積、広井一、内藤久寛と（電）話す。夜来雨あり。井伊大老茶道談を読む。

十一日

雨。今津亮三郎より来書。石塚三郎より、栗并ニ鮭の味噌漬を贈り来る。大隈侯父子を訪ふて文明協会紀念会を」（七六オ）二十六日大隈邸ニ於て、同講演会を三十日青年会館ニ開くの件を決す。日清印刷会社の重役会ニ臨み、職工、職員増給の件を決す。物価騰貴の為め壱割以上の増給を為すこと四回に及ぶ。新設石版工場を一覧して午後帰宅。不在中、林田源太郎来訪。又並木覚来る。北越詩話の件ニ付五峰ニ郵書を発す。午後事ニ倦み雨中散策、坊間に漢語書法通解を購ふて帰へる。

十二日

」（七六ウ）

雨。森脇美樹来る。文明協会の事を処す。印刷会社より人を招き、北越詩話序文組方其他進行上の件ニ付云々す。林田源太郎、市村英輔（スケ）、坪内の添書を携帯、美術研究会を早稲田ニ起す件ニつき長時間協議して去る。坂口五峰、石塚三郎ニ書状を発す。石塚より重ね生鮭壱尾贈らる。午後、中野武営葬式ニ臨む、式場青山斎場也。今夜、高田、坪内、田中唯と共ニ学校の騒擾を処理したる校友昆田、増田、早速、渡辺ニ招かれ紅葉館ニ饗応を受く。」（七七オ）大観社より物を贈らる。

十三日

陰。並木、森脇来る、文明協会の事を処す。種村来る、出版部の事を処す。関太郎より来書。内藤ニ電話。湯浅半月ニ幅代十円渡す。近衛公より廿日古文書展覧の案内到る。十一時出游、銀座ニ物を購ひ、松喜ニ飯し、児と共ニ浅草の活動写真を見て夜に入り帰宅。在大阪山田清作より来書。高村真夫より来書。関太郎ニ書状を発す。不在中、昆田文二郎」（七七ウ）来訪。高田竹山、古籀篇脱稿紀念会并展覧会（二十日帝大山の上）案内状到る。

十四日

晴。在越後北堂へ金子入書状を発す。今井友次郎死去ニ付悔状を発す。又、高橋義彦ニ書状を発す。早稲田大学より新幹部組織完成の通牒到る。北越詩話の件ニ付坂口五峰ニ簡す。踵て五峰より来簡。日課謄写了。午後出遊、東台の文展を覧る。」（七八オ）

十五日

晴。今早朝、渋沢男を王子の邸ニ訪問し、浮田博士と共ニ男ニ文明協会十周年紀念会ニ出席を請ふて其の承諾を得。男より早稲田大学の紛擾始末ニ付、余等両人か維持員を辞したるニ関し鄭重なる挨拶あり。昆田文二郎来訪、学校の件を内談す。種村、増子又来る。午後より雨降る、籠居、書を抄す。日本弘道会より徳育ニ関する展覧会を開くにつき所蔵の品出陳せよと依頼状来る。夜来雨。（七八ウ）

十六日

雨。森脇美樹、小久江成一、種村宗八来話。根津五郎右衛門、内藤久寛の紹介にて来訪、帝国美術協会の会頭ニ大隈侯を戴かんとする件ニ付云々す。田中穂積、昆田文二郎、内藤久寛と電話。午後出遊、昨日より閑ニ乗じて井伊大老茶道談中閑夜茶話の会心の箇所を抄録し寸珍本一冊謄写成る。署して清風瑣談と云ひ寸珍文庫中ニ加ふと云ふ。巌谷小波より千馬会紀念帖を贈らる。平山堂より水戸家売立目録を贈り来る。」（七九オ）

十七日　大祭日

雨気濛々たり。早起。文明協会の十週年紀念会ニ配布すべき趣意書の稿を立つ。郷人池田善三郎（雨江）より近著「真人良寛」を贈らる。森脇美樹来る。日本図書館協会より廿二日評議員会開会の通牒到る。小久江成一、山田清作来訪。客散する後、児を伴ふて文展に抵り観る。すき腹を堪らひ場内時後れて寿司を喰ひたるが因をなし

十八日―二十日

午前三時、夢覚めて腸胃に故障あり。天明、苦痛漸く甚しく、終日蓐中にあり。又、終日絶」（七九ウ）食。

十九日　苦悶去らず。リチネを服して腸を一掃せんとす。嘔気を催し皆な吐出す。此日、前田医来診あり。慢性腸カタルと診す。投薬し去りたるも、食も茶も一切口に入らず。但し熱も出です。唯た悶々、蓐中ニあり。夜に入り内子灌腸を試む、功を奏せずして已む。

二十日　状態依然腹部痛み、熱気なく嘔気なきも食気絶対になく口内乾燥、不快甚しく唯たしきりに睡眠を催すのみ。今朝亦リチネを服し利を図る。而して」（八〇オ）功

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

なし。午後再ひ復(ママ)するも亦功を見す。二時頃ニ至り腹部の疼痛俄かに激かしく床上に臥し居るを得す。展転反側備さに痛苦を嘗む。前田を招き苦痛を脱せんため注射を試む。一回の注射よく其功を告くる能はす。再ひして僅かに苦痛を減す。幸ひに発熱なきも数日絶食のため衰弱漸くあらはる。医憂ひ夜に入り大灌腸器を携帯、灌腸を試む。而かも充分排出を見る能はず。殊に今日二回迄服したる下剤油薬の毫も排出物中に交り居らさるを見て医愕然たり。」（八〇ウ）

（八一オ　白紙）

廿一日

今朝気分あしく、勿論飲食を絶つ。偶々広井一、田村荘次郎来る。特ニ病室ニ延て見る。疲労のため久しく対晤ニ堪へず。前田医、昨日二度迄リチネを服したるも効なく、灌腸も亦ハカ〳〵しからさりし結果を電話にて聴取し来り、十時より亦大灌腸に着手す。忽ち利す。一回唯た肉片一、二を混したる水を見るのみ。前田不審の思をなし、若し更らに一次二次に及ぶも、尚如此んば他の医師をも招かれたしと注意す。医は」（八一ウ）下剤の鉱泉を念の為めにと一椀を飲ませて去る。医去る後、再ひ利す。今度始めて大便出て来り、昨日二度迄投したる油剤も始めて混し出てたり。それより三回、四回に及ぶ内、鉱泉下剤漸く効験あり。厠に上ること十回の多きに上り通宵一睡を得ず。食気益々振はす。唯た頻りニ渇を催し半夜氷を噛む。不快云ふ可らず。内子、徹宵看護、患部を緩め天明ニ至る。此日、新潟関太郎、高橋義彦等より来書。」

（八二オ）

廿二日

昨夜暴瀉頻々、通宵眠を得ず。四日ニ及ふ絶食状態の疲憊を甚たし。加え今朝、特ニ衰弱を支体面貌ニ見る。但し、灌腸奏効のため気分は不可なりか、今朝は床を座敷ニ移し、人を見て一、二の事を弁せんとす。朝餐全く味なし。但た紅茶のみ口ニ可なり。森脇美樹、協会の件ニ付来話。同会より金百円也月末迄融通頼み領収。前田医来診。昨日の緩通を報告せしに、前田は初めて安心したりと云ふ。一昨日の状況にては腸に」（八二ウ）くねりにて

も生じ上下通せす。其れがため二度まで服したるリチネ下剤薬も効なかりしかと一時案したり。外科施術を要せさりしは何寄の仕合と云ふて方剤を定めて去る。田中唯一郎来り、日清生命保険社長中野武営死去ニ付、後任に関する内談あり。偶々今朝高田早苗より右ニ関し一書到る。曰く中野の後任として自分擬さる。学校の乱余受くべきや否や。余と坪内ニ内密相談す、云々。余、田中へ高田を今挙るの不可なるを言ふ。又、坪内」（八三オ）逍遙を招致し此事を図る。逍遙全く余と同説なり。逍遙二時頃去る。客去つて疲憊を覚え少しく眠る。此日一回便通あり。夜分二回あり。皆暴瀉の余滴に過ぎず。今夜図書館評議員会あり、行く能はず。

二十三日

晴。今朝又牀を坐敷ニ移す。朝餐のオートミール初めて味あり。常食の量を尽すを得たり。徳川頼倫侯経営の南葵文庫附属大礼紀念館開館式（廿七日）の招待状到る。又、早稲田大学ニ」（八三ウ）於ても同日三十五年紀念会を兼ね、森村市左衛門寄贈の応用化学教室の開館式あり。然れとも健康状態は此等ニ臨むほど早く回復し難きを覚え、共ニ断り状を発す。菊屋花を齎らし来る。田中唯来話。落合の留守居爺、木より墜ち腰骨を挫きたりとの報あり。骨継医へ遣す手当を為す。午後、昂を落合へ遣し。当面の事を処理す。夜に入り小林銀治来る。負傷留守居の事ニつき協議す。晩食ニ初めて粥二椀、さしみ、野菜を食す。皆漸く味を覚ふ。

十八日払暁発病以来、日記ニ筆を執る」（八四オ）能はす。十七日以来の記事は廿三、四両日記する所なり。十八日には文明協会の幹部員を余の宅ニ会し、賛助会員募集法を講する筈なりしが、それも能はず。二十日には種々の展覧会あり。水戸家蔵器の売立は兎もあれ、近衛公の古文書展覧、高田竹山の古籀篇完会会等ニ招かれあり。これ等には臨みたく期待せしにそれも能はず。約壱週間を夢中に過したるは、かへす〳〵遺憾也。　廿四日記」（八四ウ）

二十四日

好晴。南葵文庫より廿七日大典紀念館開館の翌日、音楽

会を開くニ付その案内状到る。森脇美樹、中村康之助、並木覚太郎来訪。神楽江巻石より金明水を以つて画したる富嶽の図を贈らる。終日、蓐中にありしも食気益々進み、疲労漸やく去るを覚ふ。落合の荘へ人を遣す。夜に入り塩沢昌貞来訪あり。応接ニ疲労を生せんことを虞れ遇はすしてかへす。

二十五日

晴、風。山田清作来る。本日定期の東京市中書肆聯合売立会あるニ付、山田を遣り小本の捜索をなさしむ。南宗画家宮崎碩山来り物を贈らる、遇はす。森脇美樹、湯浅吉郎、種村宗八来訪。三時入浴、発病後の垢を去る。茶後録を筆し夜ニ入る。

二十六日

好晴、寒気加はる。今日午後、文明協会十週年紀念会を大隈邸ニ開催の日也。余この事ニ苦心する数月、而して今日すべて」（八五ウ）準備成る。但た病余の身を挺して場ニ出るの較ニ危険なるを覚え、枉けて臨まさることに決し、森脇美樹をして浮田、杉山ニ万事余に代り一日を了」（八五オ）

せんことを托し遣る。昨日の図書市より余の依頼にて、余の目六以外の小本を漁り山田清作持参。齎らす所のもの概ね上海石印の院本にて不用のもの十が八、九を占む。僅かに三、四を収めて皆返す。旗野澄子、ダリヤの咲き乱れたるを多く携へ来り贈る。瓶中に挿むて坐上に置く。本年ダリヤを賞するはこれか初めて也。午後、客なく謄写」（八六オ）を事とす。本日の協会十週年会は一時頃大隈邸ニ評議員会を開らき、二時より紀念会ニ移る予定にて、昨日迄来会の通知のありたるもの二百五十名ニ達したりと云ふ。大隈会長の演説に次き渋沢男、演説ある筈。恰かも右の刻限ニ余は疲労を感し平臥、終に夜に入る。本日午前、早大ニ於て平沼新学長の就任式あり。

二十七日　日曜

朝より秋霖だら〳〵降り底止する所なし。高田半峰と電話を交換し、蓐中に入りて温臥す。大隈信常より例の灘の別」（八六ウ）製白鷹五升瓶贈らる。余もこれを得ては早く病気を切上けさるを得ず、呵々。本日、早大三十五年創立紀念会を兼ね、森村より寄贈の応用化学教室開館式

を行ふ。此の教室は大典紀念事業の一として、余委員長として着手したるものなり。晩間、昆田文二郎来訪。夕刻体温を検するに平熱より壱度高し。昨日午後より感冒ニ罹りたる也。

二十八日

雨、霽。佐伯好郎より来書。今朝体温三」（八七オ）十七度。終日蓐中にあり。昏々として睡る。広井一来訪物を贈らる。午後、前田の来診を受く。夜に入り頓服剤を服し大発汗あり。漸く平熱ニ復す。本日定規の大掃除を行ふ。

二十九日

今朝無熱。山田清作、種村宗八、田村宗次郎来訪。痴婆子伝写了。日本郵船会社へみつの印鑑を回付す。越後稲荷岡池田善三郎に書を投し、其著真人良寛の贈寄を謝す。」（八七ウ）

三十日

朝来陰鬱。午後小雨。今朝床を払ふ。尚ほ全く平愈ニ到らず。昆田文二郎より来書。稲葉岩吉、森脇、大久保等来訪。客散するの後、寸珍を謄写し、倦むて又蓐中に入る。今日午後、青年会館ニ於て文明協会の講演会を催し大隈侯、添田寿一外一、二の講演あり。終ニ行く能はず。

三十一日

天長節。和田万吉より来簡。入院中の落合別荘留守居安間利吉妻来る。入院」（八八オ）料壱週間分外若干相渡す。田中穂積来り学校の経営ニ付種々報告あり。森脇美樹協会の件ニ付来訪。午後天朗かに気澄、日光室ニ入り初めて爽快を覚ふ。暖を負ふて書を抄す。和田万吉、坂口仁一郎、平山堂利助ニ書状を発す。増田義一ニ簡して丁酉銀行手形の裏書をもとむ。西条北堂より柿壱籠贈り来る。薄暮入浴。病後二回目の入浴也。」（八八ウ）

○十一月

一日

好晴。銚子町今津亮三郎より故吉田終焉碑建設地ニつき細書到る。中村康之助、工業叢書出版案を齎らして来話。菱屋主人、旧借宅を文明協会に借受くる件ニ付来訪。山田清作又来る。午後初めて外出、出版部ニ到り編輯会に

臨む。昆田より鶉の卵を贈らる。今夜、工業叢書出版の相談の為め富士見軒ニ工業学校出身者三、四を招き、大体の設計を為す。」（八九オ）

二日

陰。稲葉岩吉より寸珍本広治平略を贈らる。森脇、広井、平山堂利助、山田清作交々来訪。平山堂より金壱千円金融頼入。これニ対し書画検出、近日売立を托する約也。内藤久寛来訪。故中野平弥母十回忌ニ付物を贈り来る。稲葉ニ書を発して寸珍本の贈を謝す。午後、坂口五峰出京来訪。抄録夜に入る。雨ふる。和田万吉より来書。越後赤塚啓作方より梨果壱函贈り来る。

三日

」（八九ウ）

昨夜の雨霽る、尚雨気あり。内子と児を拉して本郷池之端辺ニ物を購ひ、神田の書店に二、三寸珍本を得、風月堂ニ飯してかへる。湯川豊次郎、不在中来訪、物を贈らる。又、奥田雲蔵来る。中野欽治ニ書を発す。又、欽治曾祖母二十三回忌ニ付香を送る。石塚三郎ニ簡す。二時頃腹痛を感す。熊丹丸を服す、頃刻痛やむ。抄録を事と し夜に入る。

四日

晴。在釜山伊予部太吉の訃到る。平山堂より金壱千円受取。書画を売りそれにて返金」（九〇オ）の約也。丁酉銀行約手期限につき、更らに六十日間割引を了す。大阪鹿田静七店より寸珍本若干送り来る。坂口五峰来訪ニ付日清印刷会社より人を招き、北越詩話進行の件ニ付協議す。湯川豊次郎、子息豊策の件ニ関し長時間話して去る。午後、五峰再訪あり、詩書を話して去る。郷里より幾種の果物を贈り来るものあり。中ニカンタン二、三あり。此もの余か少時極めて嗜好のもの、わさびおろしにすり、砂糖を和して食ふ。味甚た佳也。余、此の果を口にせさる幾んと四十年、今日嘗めて舌を鼓」（九〇ウ）す。但た胃腸未た回復せす。多く食ふ能はさるを憾とす。

五日

小雨。小田島桂香より来書。長岡銀行約手期限ニ付、更らに六十日間（十二月三十一日）約手差入。文明協会資金募集の件を協議す。来会、広井、田中唯、並木、大鳥

居、森脇の幹部員也。増子喜一郎来話、午後、島村抱月の訃到る。降雨閉居、書を鈔す。小包にて石塚三郎夫婦ニ物を贈る。長岡関太郎より来書。」（九一オ）

六日

雨。早起、抄録了る。久志本常幸より来書。池田竜一来話。湯川豊次郎来訪。表具屋十円払。在釜山伊予部太吉死去ニ付嗣子延雄宛悔状、香典三円送る。中村芳雄ニ北越詩話題署執筆を日高秩父ニ依頼之事を托す。長野出先より江部淳夫の消息到る。神田辺ニ物を購ひ、風月堂ニ飯してかへる。村口書店ニ書物代十円五十銭払済。坐敷障子張替了る。午後、又謄写ニ時を移す。山田清作来訪。夜に入り会津八一より使を以て見舞の封書雲丹并ニ自筆の蕪村春風」（九一ウ）馬堤曲を贈らる。東儀鉄笛長男季董の訃到る。

七日

雨後晴。文明協会の田村、会務を帯ひ来訪。増子喜一郎来訪。増子より佐藤伊助証書（落合経営のため前年佐藤より壱千五百円借入之処、元利共返却につき）請取。利子残り勘定、百円の内五十円増子へ渡し済。残五十円年末払込之約也。東儀季治へ香典入悔状発」（九二オ）送す。会津八一ニ簡し見舞状を謝す。表具屋ニ托したる雑幅二出来。午後、目黒孝平来話。

八日

陰、寒。朝来客なく半日書を抄す。五日前、大阪鹿田書店より出したる寸珍本小包にて漸く着。俗書なれとも皆購ふ。午後、児女を伴ふて出遊。神田ニ図書を購ひ、銀座ニ十字屋を訪ふてピアノを検し価を取調べて帰へる。悪天気打つゝき、腸の疾患はか〳〵しく回復せず。石」（九二ウ）塚三郎より答書到る。高橋義彦ニ書状を発す。

九日

陰。湯浅吉郎、広井一、種村宗八来話。山崎直三妻死去ニ付悔状を発す。貯蔵銀行ニ書状を発す。安間の妻来る。名倉医院へ安間入院の引請証を遣す。江部淳夫来話。栗原広太著尺八史考を贈らる。呉服を購ふ、三十五円払済。」（九三オ）

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

十日　日曜

晴。早速整爾養父死去ニ付広島へ吊電を発す。坂口五峰、森脇美樹来訪。出游、神田松文堂ニ行書類纂、本郷斎藤兼蔵店より広唐賢三味集（漁洋元本覆版本）を購ふ。代料皆済。人を僦ふて湯殿を修理す。又、庭園の落葉を掃ふ。出版部より近刊書三冊配本。薄田貞敬来訪、北越新年初刊より余の叢談を載するニ付其の筆記を托す。

十一日　」（九三ウ）

好晴、朝来寒気の加はるを覚ふ。九時大隈邸に抵り、侯父子ニ面し、文明協会の要件を云々して帰へる。森脇美樹来る。又、宮崎碩山来る。坂口五峰ニ添書を与ふ。山田穀城より一身の事ニ関し長文の書簡到る。高橋謙三より来書。植木屋来り松の手入を為す。大阪の鹿田書店へ書物代を発送す。内藤久寛ニ書状を発す。病中毛髪のびて不快を感し理髪、初めて爽快を覚ふ。午後籠居、茶後録を筆す。大阪紫安新九郎より来書。」（九四オ）

十二日

晴、屋上霜あり。文明協会の件ニ付、田中唯と電話を交換す。協会の事務員植松晴喜代来訪。盈子の為めにピアノを購ふ。来月引取の約にて五十円手付入（価三百五十円也）日本郵船会社より株主総会の通知来る。配当率年六割也。長岡銀行ニ至り千六百円の手形を申受け、貯蔵銀行へ払込約手切り落し担保品取出し、更らに日清生命株百、并ニ正金六百円を長岡銀行へ入れ壱千円約手にて借入る。貯蔵へ差入担保の内」（九四ウ）日清生命株廿五手元へ戻る。落合留守居安間二週間分の院料二十二円六十銭払済。昨日、独帝退位の発表を聞き、今日又、休戦条約ニ独逸調印の新聞号外出づ。坂口五峰、小田島桂香来話。郷人より先考万延元年楷書心経を贈らる。今夜、日本倶楽部ニ中村康之助外四、五と会して出版部の工業叢書出版の件ニ付協議す。九時半帰宅。佐伯好郎の書ニ接す。

十三日　」（九五オ）

晴。早稲田ニ美術研究所を設くる件ニ付、林田源太郎、市村英輔来訪、長時間話して去る。真島信城、関太郎より来書。正午より大隈邸ニ抵る。今日偶々同邸ニ早大基

金管理委員来会を機とし出席同委員渋沢男、村井吉兵衛、原富太郎ニ文明協会賛助金の寄附を乞ひ、即座に三人共出金額決定す。広井一（在越後）ニ郵書を発す。内藤久寛より渋沢男編纂の慶喜公伝八冊贈らる。露酒ウオルカを贈るものあり、少しく味」（九五ウ）ふて如何にも強よきに避易す。

十四日

雨。坂口五峰来訪。北越詩話上巻印刷出来につき挿入墨蹟配合等の為来談あり。日清印刷より本間を招き云々す。且つ下巻の挿入墨蹟の写真全部引渡す。長岡銀行へ株券担保為持昂を遣す。文明協会用にて金壱百円也同銀行より引出す。十八日浜町弥生ニ大隈信常外二、三人を招く件ニ付渡辺亨ニ電話を以て斡旋を依頼す。佐伯好郎」（九六オ）ニ書を発す。三時より大隈邸ニ到り実業学校の件ニ付協議す。並木覚太郎来訪、文明協会募金の事を協議して去る。高橋義彦より来書。

十五日

晴、風。大鳥居、田村来る。文明協会の事を処す。田中四郎左衛門、田中唯一郎ニ書状を発す。又、吉田東伍終焉碑の件ニ付銚子の今津亮三郎ニ書状を発す。十時過外出。神田の書肆数軒を訪ふて図書数種を購ひ、多嘉羅亭ニ飯してかへる。山本知士弟晴義」（九六ウ）来訪、物を贈らる。坪内逍遙訳沙翁冬夜物語出版配本し来る。

十六日

晴。山本清義来訪。書状を為持文明協会事務所ニ遣す。抄録、半日を費す。在長岡広井一より来書。午後、増田義一を実業之日本社ニ訪ふて、文明協会の為五百円申受く。帰途、榛原ニ日誌本を購ひ、又神田辺ニ物を贖ふてかへる。」（九七オ）（九七ウ白紙）」

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

双魚堂日誌

大正七年十一月中浣起筆
至大正八年　月

別
特イ4
1919
576

双魚堂日誌

大正七年十一月十七日以降

朱方陽印
「平々
凡々」

十一月

十七日

雨。文明協会事務所を余の旧居牛込水道町三十八番地へ移すこと決定ニ付、会より田村を招き其の指図を為す。本日上野不忍弁天堂生池院ニ於て余、内田貢、和田万吉、安田善之助、坪内雄蔵発起となり、稀書複製会の為め各所より借り集めたる珍書」（一オ）展覧会を催すニ付午前十時より行く。出陳図書三百種、此内三分の一京坂より来る。安田善之助、和田維四郎出陳の内、殊ニ珍なるものあり。雨中なから好書家二百名ほど来観あり。日没頃迄発起人会場ニあり。文求堂田中慶太郎より自製の寸珍印譜を贈らる。陳列書目を作製するため費用の内へ金十円出金、山田清作ニ交付す。夜に入り帰宅。外出中、高田早苗来訪。通宵雨あり。」（一ウ）

十八日

雨。坂口五峰北越詩話の最尾、星野世恒、吉田東伍の伝を稿し来り示す。市村英輔来訪。田村、文明協会の件ニ付来話。佐伯叔作来訪、日清生命保険株を此場合売却を可とすと勧めて去る。落合留守居、明日退院ニ付妻来る。入院料并ニ若干の手当を交付す。午後、坪内逍遙を訪ふて長時間話す。朝倉無声より寸珍本二種を贈らる。今夜、浜町弥生ニ大隈信常、渡辺」（二オ）亨、田中四郎左衛門を招飲、文明協会募金の事を依頼す。

十九日

晴。柏原文太郎母死去ニ付悔状を送る。佐伯叔作来訪、其勧めにより日清保険株二十売却ニ決し、株券を交付す。尚、余名義の五株、残り分妻の名義ニ切換を頼む。村井吉兵衛ニ書を発し、坪内所望之同人屏風撮影之事を依頼す。田代亮介、斎藤樹、並」（二ウ）木覚太郎来訪。高田より山陽書幅二鑑定の為め来る。共ニ贋作と判し一書を発す。午後、坂口五峰の居を訪ふて話す。亦、坊間ニ書を漁る。

二十日

晴。庭前の紅葉燃んとす。風趣掬すべし。石塚三郎より五十公野土地の件ニ付計算書を送り来る。在朝鮮賀田直治より来書。大工を招き茶室の一隅ニピアノを据付けの手配を為す。和田維四郎、石塚」（三オ）三郎ニ書状を発す。関太郎より来書。文明協会用にて渡辺亭へ郵書を発す。郷里水原原兵作より山芋、山百合壱函、富山の小沢隆一より鮭の味噌漬を贈らる。風邪の気味あり、終日家居。

二十一日

晴。平和を祝するため、東京全市三日間休業、本日初日也。山田清作来話。九時より大隈邸ニ会し、実業学校問題を前日ニ引つゝき凝議す。終ニ大隈侯ニ面し、最後の決定」（三ウ）を為す。一同大隈邸ニ午餐の饗を受け、午後より出版部ニ於て本年度の決算と組織変更の件を決し帰宅。和田維四郎より訪書余録二帙を贈らる。稲葉岩吉、出張先山口県より寸珍本瓶史を贈り来る。又、内田貢より寸珍絵本桃太郎、比翼塚を贈らる。真島久仁子帰京ニ付白菜を贈らる。小沢隆一より来書。和田、小沢、稲葉、内田、原兵作へ贈られたるものニ対しそれ〳〵礼状を発す。今津亮三郎より来書。」（四オ）

二十二日

晴、後雨。並木、小林堅三、田村宗三郎等来訪。高橋義彦より来書。琳琅閣より唐本寸珍本左伝外壱部を購ふ。午後出游、神田の書店に四、五の書を購ふ。小波の千里閣開館（十二月一日午の日）の案内来る勝間田稔十三回忌（廿七日四谷西念寺）案内来る。熱海樋口屋より干魚

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

を贈り来る。長崎発湯川豊次郎の至急電報ニ接す。同人子息、古河会社在職中失態の事に関す。」（四ウ）

二十三日

雨、霽。坂口五峰、斎藤樹、赤堀又次郎来訪。正午出游、女児同伴、神田辺ニ物を購ひ、浅草の書肆を訪ふて二、三の雑書を購ひ、金田ニ飯し、活動写真を観、夜に入り帰宅。大工、昨日にて修補を了り、前回分共併せ工銭八円五十銭渡済。内子、真島久仁、旗野澄を訪ふ。

二十四日

晴。文明協会の田村来話。実業学校の」（五オ）件ニつき第三回の会議を大隈邸に開く。十二時帰宅。不在中、奥田雲蔵来訪、果物を贈らる。又、清水泰次、浮田博士来訪あり。湯浅吉郎も来る。午後、坂口五峰来訪。北越詩話上巻製本成る。真島信城、増田義一ニ書状を発す。今夜、五峰と赤坂花屋ニ抵り杯を挙けて詩話の成るを祝す。深更帰宅。和田万吉、渡辺徳太郎より来書。

廿五日

」（五ウ）

晴。広井一ニ書状を持たせ田村を遣し、文明協会の為金五百円引出す。赤堀又次郎親戚鹿島則順来訪。坪内逍遙と高田を同訪。早稲田出身校友冀望之美術研究の件ニ付高田と長時間話し、午餐を与にしてかへる。帰途、斎藤書店ニ立寄図書を購ふてかへる。坂口五峰、今夜帰国ニ付物を贈る。関太郎より来書。今夜、図書館同人渡辺徳太郎に築地北野屋ニ招かれ、奈良訪古の談話を聴く。夜深ふして帰宅。」（六オ）

廿六日

晴。種村宗八、佐伯叔作、増子喜一郎、小田島彦太郎来訪。高橋義彦より来書。出版部より配当金八百八十余円受取。立替を受けたる五百五十円也返却。斎藤樹来訪ニ付、新年北越新報ニ掲載すべき世界大戦意外録を口授筆録せしむ。北堂より来書。今井孫市の訃到る。本日、文明協会事務所を余か旧住処牛込水道町ニ移転す。文明協会へ金五百円横」（六ウ）山章出金承諾の書、大隈信常より通知あり。今夜、実業学校の問題ニ関し、又々維持員会あり。所労の為出席せず。越後高橋義彦より巾箱唐本淵鑑類函百六十冊を購ふ。本未着なれとも取極。価三十

一円余也。

二十七日

晴。みつ名義日本郵船会社株券六割配当決定、百五十円也領掌。妻の親戚今井孫市死去ニ付、悔状并ニ香を送る。」（七オ）廿九日夜、井上辰九郎と共ニ内藤久寛の邸ニ招かる。九時より実業学校紛擾ニ関し集会あり臨席す。十一時より日清印刷会社の重役会ニ臨み、午後帰宅。広井一来話。又、実業学校の校長杉山、幹事鈴木来訪。今日午前、大隈邸会議の決定に基つき維持員辞職の理由書を、余担当にて鈴木執筆することゝなり、余、口授、鈴木執筆す。日清印刷会社ニ於て余を社長となすの件、重役側ニ於て熟議の上異議なきことに」（七ウ）なる。村井吉兵衛より来書。坪内逍遙より依頼之件ニ関係あるニ付同人へ回付す。安藤鐳より来書。尾州犬山発和田万吉絵はがき到る。

廿八日

晴。諸税十七円十銭納付。高橋義彦より図書代金為替到達。実業学校より十二月二日維持員会通牒来る。田中唯、増子喜一郎、森脇美樹、田村宗三郎、市河三陽交々来訪。高橋義彦」（八オ）より来書。斎藤樹来る。大戦意外録、前回ニ引続き口授筆記せしむ。午後出遊、本郷の書肆を訪ふて二、三の図書を購ふてかへる。薄暮、協会の事務所を訪ふて検分す。大隈家より久原房之助協会へ五百円寄附の旨通知あり。高橋義彦より鮭の味噌漬を贈らる。

廿九日

晴、風。森脇、田村来り文明協会の件ニ付協議す。赤堀又次郎来訪、寸珍本一部を贈らる。」（八ウ）山田清作来り舞曲扇林複製本を持参。近頃早稲田大学事務員となりたる校友難波理一郎来話。市河三陽より来書。佐伯叔作ニ托し、日清生命株二十売却、壱株九十七円五十銭、本日代価領収済。村井銀行へ二百円返金。金壱千円也、石塚三郎へ郵送。右は前年五十公野土地購入之節、日清生命株券并ニ勧業債券担保にて石塚より処理せしめたる立替并ニ利子也。但し尚若干不足の計算なれとも、余は近日精算の節、勘定の筈也。四」（九オ）時半、自動車を傭ふて井上辰九郎を日本橋若尾銀行へ訪ひ、同伴麻布材木町

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

内藤久寛を訪問し、晩餐の饗を受け、戦後財政経済の談を為す。不在中増子来訪。

三十日

晴。五来欣造、藤田高之来訪。又、並木覚、森脇美樹と長時間文明協会の件を協議し、午後ニ至る。実業学校鈴木幹事来話。真島信城より来書、味噌漬」（九ウ）壱樽を贈らる。午後出遊、銀座ニ眼鏡の修理を頼み、松喜ニ飯し、神田の書肆ニ図書を購ふてかへる。村口書店ニ高橋義彦図書代百円払済。残金勘定百余円払済む。種村宗八、出版部の用件ニて来訪。植木屋手間賃十五円払。」（一〇オ）

（一〇ウ　白紙）

○十二月

一日

晴。清水泰次来訪。越佐会々長余辞任の処、復任を懇請して已ます、当分其意ニ任す事とせり。九時より三枝旧宅ニ会し実業学校の紛擾問題につき凝議、十二時ニ到る。午後より大隈邸ニ文明協会の茶話会を開らく。瑞典公使内田定槌、二時間ニ渉る大戦外交を話し、大隈侯、又一場の講演あり。余、最後に来会者ニ賛助を請ふの演説を為す。本日来会者」（一一オ）壱百名、三千円許寄附の決定を得たり。協会の大久保栄次郎、大阪より来り、外出中来訪、物を贈らる。佐伯叔作ニ物を贈る。湯浅吉郎、不在中来る。

二日

雨。在茅ヶ崎病臥の昆田ニ見舞状を発す。且鶏を送る。同窓三河屋会開会の件ニ付、隈本有尚ニ照会状を発す。協会の田村来る。長岡銀行手形二千円延期の印を捺す（協会分）。丹呉康平ニ書」（一一ウ）状を発す。九時より実業学校の維持員会ニ臨む。今日、天野も出席、議場の空気平穏を欠き、結局何等の決定を見す、散す。余は出版部ニ編輯会あり立寄る。こゝに高田、田中穂、塩沢、杉山、増子等追々来り、実業ニ対する方策を協議す。了りて坪内と共ニ日本民族時代史編纂の件ニつき凝議し、四時帰宅。夜に入り、増子実業学校の紛々につき来訪。長時間話して去る。坂口五峰より詩話ニ付来電。」（一二オ）

三日

晴。長崎の平田亀之助の訃到る。実業学校維持員会（七日午前）通牒到る。朝来、文明協会の森脇、田村、広井、大久保栄次郎等交々来訪。正午迄協会の事を凝議す。山田清作来訪。坂口へ返電、平田へ吊電を発す。斎藤樹より筆記の訂正を求め来る。午後出て、神田の書肆ニ図書を漁り、村口書店より雑書十数程購ふ。四谷ニ廻り、三河屋ニ飯してかへる。」（一二ウ）

四日

晴。神楽坂より買受たるピアノ到達、茶室へ据付。価三百二十円也払済。昆田文次郎を訪ふて実業学校の件、文明協会の件を話し、辞して大隈邸ニ到り、並木、森脇と共ニ信常ニ面して、協会募金の打合を為し、正午帰宅。外出中、湯川豊次郎来訪。午後、実業紛々につき増子来話。事ニ倦むて出遊、琳琅閣ニ雑書を購ひ、夜に入り帰宅。石塚三郎より答書到る。外出中昆田来訪。」（一三オ）

五日

晴。実業学校問題につき昆田文二郎、樋口清策来話。湯浅半月、山田清作又来る。美術研究組織の件ニ付林田源太郎、市村英輔、河野桐谷来訪。田中四郎左衛門より来書。実業学校教師田中寅雄、市川勇来訪、遭はずして返す。安藤鐳より来書。午後、文明協会新事務所ニ於て幹部会をひらき、前途の方針其他重要の事を協議す。夜に入り九段魚久方ニ協会并書院の職員を会して忘年の宴」（一三ウ）を張る。石塚より妻名義の日清保険株二十五返却領収す。

六日

晴。石塚三郎、久須美東馬ニ書状を発す。日清生命保険増株十五内子名義にて申込。畳屋来り寝室畳かへをなす。日清印刷会社の重役会ニ臨む。正午、本郷弥生町田中四郎左衛門方ニ行き午餐の饗を受け、其所蔵の絵画を見る。来ル十四日四谷三河」（一四オ）屋ニ一ツ橋時代同窓会を開くニ付通知状を印刷所へ頼む。石井政吉、井上辰九郎ニ書状を発す。文明協会募集用也。本日、田中宅の会合は茶会にて相客大村彦太郎、横山俊次郎、古筆□（ママ）□也。本日、印刷会社重役会ニ於て本期配当壱割二分と決す。又、

社長を置く件を決す。浅野総一郎（千円）、田中凡（五百円）協会へ寄附の申込あり。関太郎より来書。種村宗八、湯川豊次郎来訪。」（一四ウ）

七日

晴。真島信城、内藤久寛ニ書状を発す。一ツ橋同窓会員三十五名ニ三河屋会通知書を発す。湯浅、田村、巻等来る。会津八一より来書。今朝、実業学校ニ維持員会あり。増子ニ依頼状を発して臨ます。十時より外出、村口、琳琅閣、文求堂書店を歴訪して、数十部の書籍を購ふ。田代亮介より書画為持使来る。」（一五オ）

八日

晴。増子来訪、昨日実業学校維持員会の模様を詳報して去る。協会の森脇、田村来訪。踵て小久江成一来訪。石丸竜太郎より先人の詩稿版本を贈らる。直ニ謝状を発す。内藤より北越詩話刻費壱千円を両度ニ出金する事決定ニ付、坂口へ右報告旁一書を発す。田代英一来訪。真島桂次郎より来書、且塩引一尺を贈らる。午後、季女を伴ふて出游、神田村口書店ニ巾箱本御選唐詩を購ふ。金」（一五ウ）春館の活動写真を見、銀座松喜ニ飯してかへる。

九日

晴、風。渡辺亨、田中四郎左衛門ニ書状を発す。又、真島桂次郎へ塩引の礼を申遣す。落合の荘松手入代十二円払。並木覚太郎、山田清作来訪。林田源太郎来る。大隈家へ書状を附す。午後、文求堂を訪ふて寸珍唐本三種、石梁宝笈目録を購ふ。」（一六オ）

十日

晴。池面凍結、午ニ至るも解けず。森脇、募集の結果を報じて去る。種村宗八外一人来訪。午後出遊、神田の書店ニ雑書を購ふて帰へる。増田義一より来書。十三日、高田、坪内、浮田、田中等と香雪軒に招かる。出版部を株式会社とし、学校も株主たること維持員会ニ於て決定す。

十一日

晴。広井一、並木、森脇、田村、山田清作を招致し、協会の要件を協議す。山田を会」（一六ウ）ニ入れ、須要の事務に与らしむる事を決す。十二時ニ至り協議了る。十時

頃より雪降り出づ。午後ニ至り天地一白。或は雪の為めに樹枝を圧折せんことを虞れ、人を傴ふて雪落しを為す。夕刻ニ至り霽る。

十二日

晴。昨日の雪、凍結天地皚々たり。出版部ニ高田と会す。昨日、実業学校新旧当事者の間ニ波瀾あり。それを処するため」（一七オ）杉山前校長、鈴木前幹事来部。増子も又来り、種々凝議す。右終つて早稲田の出版部を株式組織ニ変する件ニ付、一昨十日学校維持員会ニ於て可決したる報告を聞き、今日は学校より平沼、田中（穂）全権委員として来部。種々凝議し、午後帰宅。内藤ニ簡して坂口の北越詩話刻費補助金五百円申受く。学校の事務員難波理一郎、今夕北越へ出発ニつき来訪。諸般の打合を為して去る。弥彦の宮司の高松四郎不在」（一七ウ）中来訪。賀田金三郎より洋酒半打を贈らる。又、山田清作より物を贈らる。泥路車を駆り、文求堂并ニ琳琅閣ニ図書を購ふて、夜に入り帰宅。真島信城より梨果壱函到来。

十三日

晴。弥彦宮司高松四郎来訪。湯浅半月来る。森脇美樹、協会の事務ニ付来話。琳琅閣書物代二十五円払済。歳晩家用の内、弐百円内子ニ渡す。和泉五郎より松前鮭三尾贈り来る。坂口五峰より」（一八オ）来書。午後出て、神田の書坊ニ雑書を購ふ。村口書店主に二十三円余払済。今夜、増田義一ニ招かれ香雪軒ニ飲む。高田、坪内、田中唯、大山郁夫同席。

十四日

好晴。増子喜一郎、実業学校の件ニ付来話。高橋謙三来訪、物を贈らる。西条北堂へ金二十円郵送。増子ニ金五十円也渡す、佐藤伊助より往年借入金の利子これにてすべて済む。森脇来訪、朝来募集の」（一八ウ）結果を報して去る。午後、市中に出て図書を購ふ。五時より余幹事にて一ツ橋時代同窓を四谷三河屋ニ会して牛肉会を開らく。来会者十五名。帰宅後、和田万吉、石井政吉より来書。此日、協会へ寄附額古河男外二人にて壱千八百円決定。畳屋へ二十二円六十銭払。

十五日　日曜

晴。石井政吉、和田万吉ニ書状を発す。落合荘電燈料高田弥一郎立替、十八円五十銭払済。佐藤吉五郎死去ニ付香典五円遣す。」（一九オ）十時より女児を伴ふて神田辺ニ物を購ひ、又銀座ニ出てゝ二、三の品を購ひ、松喜ニ飯し、金春館の活動写真を観、夜に入り帰宅。

十六日

晴。北越新報新年号の原稿を校す。山田清作来訪、伴ふて文明協会事務所ニ到り、山田を紹介し且つ事務の分担を定む。庭樹保護会の人来り庭樹を検す。四、五の樹木ニ手当を托す。午後、又大戦意外録を校す。今夜、大隈信常、西久保弘道」（一九ウ）等と共ニ高田半峰ニ招かる。信常自動車にて立寄られ同乗して行く。自笑軒ニ飲み、酣酔帰宅。

十七日

雪天陰鬱、寒気甚し。真島信城ニ書状を発す。杉山重義、種村宗八、森脇美樹交々来る。正午、内子と共ニ浅草ニ行き羽子板店を観、金田ニ飯し、浅倉屋ニ淵鑑類外数種の書を購ふ。帰路亦琳琅閣ニ立寄り」（二〇オ）雑書を購ふてかへる。加賀能川元重より雲丹、新潟松木弘より梨果一函到来。

十八日

晴。山田清作、林瑛来話。大戦意外録の稿を修めて北越新報社へ投す。愛樹会より人来り庭樹ニ手当を加ふ。煙山専太郎より来書。植木屋来り、松樹ニ縄を吊るし、対雪の手当を為す。真島典二より白菜を贈らる。渡辺亭より来書。」（二〇ウ）

十九日

晴。渡辺亭ニ答ふ。今朝、帝国通信社の重役会あり、行かす。十時より出版部ニ到り、歳暮の賞与金を部員ニ与ふ後、出版部の株主総会を開らく。出版部を株式組織ニ変するニ就ての会議也。午後、坪内と留まり出版物ニつき協議してかへる。小田島桂香来訪。夜に入る迄話す。北越新報社より寄稿催促の電報到る。出版部より巾箱本源氏物語三十冊を贈らる。」（二一オ）

出版部は従来五万円の匿名組合なりし処、今度十万

円の株式会社として、社名を矢張早稲田大学出版部と呼ぶこと、学校ニ対しては従来二割の冥加金を出し居りしか、今度此の利得を生する株三万円を学校ニ献し、学校も株主となることとなれり。部長高田、主幹余旧の如し。高田社長、余副社長なり。両人の外、取締種村、高田俊雄、監査役小久江、田中唯、相談役大隈信常、学校を代表して平沼、田中穂積、編集顧問坪内」（二二ウ）雄蔵と決す。従来匿名組合の規程には株主死するときは株を戻し、子孫相続する能はさりしもの、今度は普通株式会社の規程の通り子孫相続し得ること勿論なり。余の持主百五十即ち七千五百円也。尚、余の俸給これ迄年額千円の処千五百円ニ増額したり。

二十日

雨。森脇美樹来る。協会幹部員歳暮」（二二オ）手当、来年度給与等を定む。協会より預り金壱百円返却。内子ニ壱百円渡す。午後、雨中なから神田より本郷辺書肆を訪ふて図書を購ふてかえる。真島信城より鮭壱尾到来。北堂より来書。

二十一日

晴。五来素川来話。文明協会協会（ママ）ニ至り事務員ニ賞を与ふ。日清印刷会社より半季謝金五百円を受く。午後、神田の村口書店ニ図書を購ふ。二時、永楽倶楽部を会場とし」（二二ウ）て日清印刷会社の総会を開らき、本季配当一割二分を決し、取締役一名増員の件を決し、社長として余推薦せらる。余、一場の挨拶をなし閉会。高田半峰、山沢俊夫と共ニ人形町相互倶楽部に売立の書画骨董を一覧し、会社の幹部と山谷の八百膳ニ飲む。丹呉康平より来書。

二十二日　日曜

晴。田原武夫、病気回復して訪ひ来る。山田清」（二三オ）作来訪。高橋義彦より廿四日入京を報し来る。文求堂を訪ふて、前回買入勘定三十円払。更らに趙士謙印譜八冊を購ふてかへる。午後、又児と共ニ出游、銀座ニ物を購ふ。ピアノ修繕成る。十一円払。

二十三日

雪降る、後雨。湯浅吉郎、田村、森脇来る。日清印刷配当（百十七円、三十五円十銭）二口請取。文明協会より五十円歳暮謝礼として受取。高橋義彦出京、来訪。踵て小田島」（一三ウ）彦（ママ、彦太郎）、高橋源一郎来る。故吉田博士紀念碑、遺稿の事等を協議し、午餐を共にす。一時客を留めて日清印刷会社ニ到り職員一同を会して社長就任の披露をなし、且つ歳暮の賞を与ふ。帰宅後、坪内逍遙来訪、用談の後去る。高橋義彦、小田島を留めて、夜に入る迄話す。今日、高橋義彦ニ前年土地購入之節借受の五百円返却。尚又、坂口の為め内藤久寛出金の五百円、日清印刷会社へ北越詩話印刷費の内へ」（一四オ）払入了る。高橋より鴨を贈らる。丹呉康平より鮭塩引、石塚より鮭卵を贈り来る。丹呉、真島両家、石塚、賀田、松木へ歳暮之挨拶として海苔を小包にて発送。石塚へ反物壱反、五十公野土地の件ニ付礼として遣す。降雪夜に入り罷む。

二十四日

晴。樋口清策、山田清作来訪。今泉雄作の紹介にて京都の骨董商令古堂植西菊」（一四ウ）男、足利尊氏の署名ある経巻を齎らし来る。二巻購入、此価五十円也。内藤、賀田金三郎へ歳暮品為持人を遣す。文求堂より古香斎寸珍史記、漢印分韻、繆篆分韻を購ふ、此価三十円也。万屋来る。雑本を売却、此価十五円也。人形町相互倶楽部ニ図書の売立あり、行き観る。寸珍本晩唐詩鈔十五冊外数種を得てかへる。昆田文二郎より嘉良寿美、小鳥を贈り来る。茶後録を筆し夜に入る。」（一五オ）

廿五日

晴。在台湾和泉文三より来書。富山の小沢隆一より来書、炭五十俵発送したる旨申越す。落合の荘ニ到る途中、高田弥一郎方へ立寄、立替勘定払済。荘の留守居夫婦ニ歳暮手当若干遣す。不用図書百余検出す。近日売つて他の入用の書を買はんとす。午後、文明協会事務所ニ至り、幹部会を開らく。来年度予算等ニつき長時間協議、夜ニ入り散会。協会募集金二万円を抜く。」（一五ウ）不在中、難波理一郎来訪。坂口五峰出京を報す。夜に入り雪交りの雨降る。石塚より例年の如く糯を送り来る。北堂より

子女に物を贈らる。寝後、新潟桜井市作より電報あり。積善組合ニ事起り、新潟新聞理事ニつき云々し来る。

廿六日

昨夜の雪積むこと二寸余、窓前の竹二竿折る。今朝、庭園の諸樹雪落しを為す。よく検するに、池辺の梅樹折れ風致を」（二六オ）失ふ、惜む可し。神楽坂印判師ニ托したる昂、光の実印二顆出来。江部、田村来訪。坂口五峰、踵て到る。鱈の子を贈らる。広井、又来り新潟、北越両社より謝金として金壱百円贈らる。三人会食して別る。桜井市作より再度の電報到る。坂口と協議の上、返電を発す。大隈信常より醇酒五升を贈り来る。昂ニ時計代金五十円交付。午後、浅草ニ散策、浅倉屋書物代五十円払済。銀座ニ廻はり児女の為、物を購ひ、松喜ニ」（二六ウ）飯してかへる。出版部組織変更ニ付、旧出版部解散手当として旧職員ニそれ〳〵若干金を配る。余壱千五百円を受く。越後佐藤伊助、河内広次郎より物を贈らる。

二十七日

晴。大鳥居弃三来訪。大隈信常へ越後塩引を贈る。坂口五峰へ使を遣し、幅を取寄す。小沢隆一、広井一ニ書状を発す。難波理一郎より来書。落合の荘へ車を為持、不用図」（二七オ）書を取寄す。田村宗三郎、文明協会の事務を帯ひ来る。且つ高島秋帆好遺印譜を贈らる。神楽江巻石来る。歳暮として金十円遣す。種村、出版部の件ニ付来話。桜井市作より謝電到る。増田義一ニ約手裏書を乞ふ為一書を発す。河内広次郎より来書、且野鴨を贈らる。

二十八日

晴。市村英輔来訪。藤本慶祐、薄田貞敬又来る。森脇美樹、並木覚太郎又来る。」（二七ウ）書肆群書堂（広谷）を招き洋装雑本を売却す。此価七十円也。午後、長岡銀行支店を訪ふて借入金壱千円返却。帰途、神田の書店ニ雑書を購ふ。山本書店三十五円、村口書店十三円五十銭払済。

二十九日

晴。賀田直治より来書、平壌栗を贈らる。内藤より使来り物を贈らる。神田ニ出てゝ若干の図書を購ふ。日清印刷より社長給壱百二十五円を送り来る。これ第一回の給

翻刻『春城日誌』（二九）――『双魚堂日誌』大正七年七月～十二月――

に」（二八オ）して期せさりし収入ニ付、図書代払ニ向ける。伊予部太吉未亡人親戚水戸勝彦来訪。坪内大造又来る。夕刻、江部淳夫来訪ニ付、児昂をも拉して、米沢町鳥安ニ到り飲む。

三十日

晴。関太郎、石井藤五郎より来書。石井長男死去ニ付香典を遣す。十時外出、本郷、浅草の書肆を訪ふて雑書十数点を購ひ、更らに銀座ニ出て児女の為物を購ふてかへる。不在中、小田島桂香来る。」（二八ウ）井上辰九郎と元日国府津ニ高田を訪問せんことを約す。各所より歳暮品を贈り来るもの頻々たり。小田内通敏より来書、且近著を贈らる。

三十一日

晴。小久江成一、田村宗三郎来話。菊屋花を携え来る。又、出て、神田ニ図書を購ひ、終に日本橋ニ到りひかげかつらを購ひ、コノわた四樽を購ふてかへる。昆田来訪。夜に入り帝国通信社より謝金五十円持参。」（二九オ）例のことく晩餐。家礼のことく家族団欒、一年の大饗を為す。床ニ不老富貴の瓶花あり。柱にひかけかつらあり。新年気分室内ニ充つ。食後、女洋々西洋楽を奏し来る。酔後、一年の大略を叙すること左の如し。」（二九ウ）

大正七年日記の末に記す

本年も暮る。余、一齢を加へ六十となる。老齢を欲すると共ニ本年無事ニ経過したるを自祝せさる能はず。将さに来らんとする元旦は、平和後初めての歳旦なり。世界列国ニ同慶を申さざるを得さる也。

本年の来路を回想するに、例のことく際立ちたる重要の件、身上ニあるなし。学校騒動の善後はまかりなりに成り、余等の冤罪も雪かれたり。校規」（三〇オ）改定の後、組織されたる幹部は、幸ひニ余等と同志のもの多数を占めたり。但た余は他の二、三と共ニ維持員推薦ニ洩れたり。浮田と余は終身維持員の推薦を受けたるも吾れより辞したり。天野を除外したる釣合上、斯ることゝなるは浮世の習ひにて、仲裁人の顔を立てるに斯ること昔しも今も同様の慣例に因る。但し仲裁者は時機を見て余の面

目を立つべしと内約す。

本年数月間労したるは、文明協会」（三〇ウ）并ニ文明書院の事なり。諸色高価の影響を受け文明書院も死ニ瀕し従来のことく人任かせ委し去る能はず。進むて書院の為壱万円の株金を募り、更らに協会の為めに寄附金を募り、これも成功して年末迄ニ二万円以上を募集し得たり。来年は進むて一活躍を試みんことを期す。

余の相談役として関係ある日清印刷会社は、十二月の総会ニ於て余を」（三一オ）社長ニ推薦したるにより、余も受任せり。余は営利会社ニ関係するを好まされど、余の生涯は図書と密接の関係あり。余の受任したる所以也。余は、一方文明書院の社長を諾したると共ニ印刷会社にも社長たり。来年より漸く繁劇を加へんとす。

学校改革の余波として、早稲田大学出版部を株式組織ニ改めたり。余の位置は復（ママ）社長格たること旧の如し。但た来年より一層此方面」（三一ウ）にも努力を要する也。

本年友人坂口五峰三十数年苦心の著書を出版するにつき印刷其他ニ数月間斡旋したり。又、山田清作ニ図書の複製を試みしむるにつきこれにも断へす周旋したり。

夏期の避暑を廃し、閑ニ乗して自叙伝を作らんと思ひ立ち四冊を筆録したるも一半ニ過ぎず。尚消閑のため寸珍写本を作らんと思ひ立ち、三十余冊を筆写したり。」（三二オ）

本年書画骨董得る所甚だ少なし。年首二、三ヶ月僅かに若干を得たるのみ。余か趣味は一転図書ニ移り、寸珍本を蒐集することを思ひ立ち夏以来、日々坊間を漁り、年末まで得たるもの四百二十数種。而して寸珍本容易ニ得可からさるに得たり。普通本の蒐集をつとめ、永く空闕を告けたる書函二十許皆完填せり。但し珍本蒐集にあらず。多くは己か趣味の参考となるべきもの也。此」（三二ウ）等大小図書の蒐集ニ投したる金は、壱千円を超ゆ。

本年物価甚しく昂騰し、家計前年ニ倍す。而かも幸ひに嚢中余溶あり。若干の株券を購ひ、又若干の負債を消却するを得たり。数年間、高橋、石塚ニ立替を依頼し、郷里五十公野ニ購ひる田地の代価も年末すべて償却し了りたり。

本年の不幸は、年首ニ吉田震卿を喪ひしことなり。学界の為めに惜しむのみ」（三三オ）ならす在京唯一の親戚を喪ひたるを悲しむ。

余の健康は敢て非なるにあらす。唯た本年悪性の感冒流行し、余も秋季之れニ罹り数十日苦しみたり。余の右顔の痙攣は追々甚しく、これには困却なり。視力ニ関せさるか故に放任す。併し今より一層甚しきに及はゝ外貌失明のことく見ゆべし。来年は治療を要す。然れとも恐らく手段なからん。」（三三ウ）

本年多く旅行せす。吉田の銚子ニ客死したる為め此方面ニ両度行き、日本図書館協会の大会を越後ニ催すにつき東道して帰国したる耳。

余の郷里の二新聞ニ関係あること依然たり。本年両社へ二十数回連続する稿を二回掲出したり。五峰詩話の評論的紹介文、衝口発、赤倮々、百道楽、吉田震卿遺事等也。」（三四オ）